

終焉の芸術、茶に染まる地平

プロローグ 真夜中の黒魔術

ワイルドハント芸術学院の学生寮は、複数人の生徒が一部屋を共同で使用する運営体制を取っている。寮では各部屋ごとに水回りが用意されているので、部屋の外には設備が基本的に存在しない。

たった一つだけ例外があるとすれば、それはトイレ——各学生寮の一階に用意された共用のトイレが、唯一、学生寮において部屋以外に存在している設備だった。そのトイレも使用者がいるのは朝食後の時間帯のみ——多くの生徒が便意を催す中で、部屋のトイレで順番を待つことを嫌った一部の生徒が訪れて使う光景が見られるのみだった。故に日付も変わろうという真夜中の時間帯に、共用のトイレまでわざわざ足を運ぶ女子は誰もいない。センサー式の照明が点灯することはなく、共用の女子トイレは今日も暗闇に包まれている。

その扉が開かれ、センサーが反応したのは、零時ちょうどだった。「ふう……。良かった、誰もいませんね」

明かりの点いた空間は無人で、一斉に点灯した蛍光灯が、開かれている扉を照らし出す。縦に長いトイレは入って左手の壁沿いに個室が五つ並んでいた。奥側に二つある外開きの扉の奥にあるのが洋式の便器で、残る三つの個室には和式便器と内開きの扉が備えられている。

乾式の床にはしっかりと清掃こそ行き届いていたが、洋式トイレには温水洗浄便座もついておらず、そもそも過半数が和式便器となっているこの学生寮のトイレは、古さが否めなかった。

それでも、この便器を欲する者がいる——特徴的な三角帽子を被った白尾エリは、無人のトイレを見て小さく安堵のため息をついた。

「こういうときは、和式の方が良いですよ。それに……部室のトイレでは落ち着きません」

独りごちたエリは、扉を閉めた右手をそつと下腹に当てる。豊満な胸部に隠れながらも膨らみを隠せていないその腹は、エリにしか分からないトラブルを抱えているようだった。

少し迷った後に、エリは手前から二番目にある和式便器の個室を選択した。扉をゆつくりと閉め、鍵をスライドさせる。和式便器を跨いだエリは、黒色のショーツをゆつくりと膝の下までずらす。両足を一歩ずつ前に動かしながら、エリはしやがみ込んだ。

「ん……っ」

ぶぶぶううううっ　ぶびっ　ぶぼっぶしゅっ　ぶううっ！

露わになった肛門が震え、静寂に包まれていた女子トイレの中の空気が大きく振動する。お腹の中に溜まっていたガスが、開かれた尻の穴から勢いよく噴き出していく。乾いた音が数度繰り返され、エリの入っている個室はたちまち、濃厚な発酵臭に包まれた。

部室——この第四寮において与えられた部屋である四〇四号室でずっと我慢していたガスをようやく放ったエリは、けれども動きを止めない。足をさらに大きく開き、和式便器に触れそうになるほどに尻を落としたエリは、声が出るのも構わずに息んだ。

「うううんっ！　んぐうう……うんっ！」

ぶっ　ビィィィッ！　ぶしゅっ、ぶりりりいいいっ！

尻の穴が隆起する。熱いガスが何度も噴き出していく。

だが、エリが本当に便器へと出したいものは顔を出さない。肛門が開いても出てくるのは直腸に溜まっていたガスばかりで、その奥に溜まっているはずの焦茶色の塊は顔を出してくれない。

——白尾エリは、便秘に苦しんでいた。

「んんんっ……！！　うゝんっ……！！」

ぶ……ぶび　ぶぶうっ　ふすすすっ……ぶり。

（今日で四日でしょうか……お腹の下の方にマナが溜まって重い感じがします。なんとかしたいのに……）

排便にどれだけ時間が掛かるか分からないエリが、混雑する朝のトイレを占拠してしまえば誰かに迷惑が掛かるかもしれない。特に一つしかない自室のトイレを使ってしまえば、カノエやレナ、ツムギを待たせてしまう可能性も高いだろう。故にエリは強い便意を催さない限り、朝のトイレを排便目的で使用することはなかった。

その代わりにルーティンとなったのが、真夜中の共用トイレに通って排便にチャレンジするという行為だった。便秘が三日に差し掛かった頃からスタートし、運が良ければその日か、その翌日くらいにはエリの言う「マナ」が無事に体外に排出される。

普段を思えば、今回の便秘は強敵であった。昨日も、その前の日も真夜中にトイレへと足を運んで十分ほど息んだが、成果は皆無。今日もいくら踏ん張ったところで、出口付近に留まった巨大な塊が出口に向かって動く気配は全く感じられなかった。

「諦めましょう……最後の手段です」

最後にぶっ、と小さく放屁をして、エリは諦めの表情を浮かべた。

トイレットペーパーを巻き取り、意味もなく臀部に押し当てる。汚れの付かないペーパーを便器に落とし、レバーを倒して透明な水を下水道へと流す。

手を洗ってトイレを後にしたエリは、自室に引き返すと他の三人が寝ていることを確認して、こっそりと枕元にある「黒魔術」と書かれた小箱を開き、ピンク色の錠剤を一粒取り出した。

（特殊交易部のミヨさんに手配してもらった薬……飲むのは初めてですが、八時間で効いてくるらしいので、明日の朝にはきつと）

ひょんなことから、カノエ経由でミヨ、ひいては特殊交易部の存在を知ったエリが、最初に依頼したもの——それはワイルドハントでは手に入らない強力な便秘薬だった。初めて手にする小粒の錠剤を握り、数秒の躊躇いの後、エリは枕元の水でその錠剤を飲み込んだ。

本当は寝間着にでも着替えたいところだったが、長時間の格闘のせいで眠気が限界寸前だった。もつとも夜遅くまでオカルト研究会としての活動をしていたせいで、この四〇四号室に眠る四人は全員、普段の服装のまま眠りにについている。エリもまたベッドに横になった瞬間、睡魔に飲み込まれていく。

（これで……明日の朝には、楽になるはずです）

強く催してしまったら、部屋のトイレで順番を融通してもらいましょう——そう考えながら、エリは眠りに落ちていった。

第一幕 オカルト研究会

1 白尾エリ

草木も眠る丑三つ時——午前二時半過ぎのこと。

深い眠りに落ちていたはずの白尾エリは、猛烈な腹痛と便意によって強制的に意識を現実へと引き戻された。

「……っ!？」

（お、お腹が、急に……っ！ 夜中に飲んだ便秘薬が効いてきたのでしようか……いえ、それにしては時間が……）

ギルギルギルグルグルルルギルピィィィ……ッ！

（い、今はそれどころじゃありません、トイレに行かないと……マナ、う、うんこが漏れてしまいうですっ!!）

人間にとって最も根源的な欲求——生理的欲求を前にエリは、この張りに張ったお腹の中に溜め込まれている物がマナなどという生易しいものではなく、茶色く汚い大便であることを認めなければいけなくなった。つい二時間半ほど前に使った、あの白い陶器を跨ぎたくて仕方がない。熱い腹の中身が狭い腸管の中を暴れ回り、尻の穴は今にも爆発してしまいうさうだった。

尻の穴をしつかりと閉じながら、エリはベッドの上で起き上がる。二段ベッドが二台置かれているこの部屋だが、上段ではなく下段を選んで良かったと思った瞬間は、今が初めてだった。よろけるようにベッドから這い出たエリは、部屋の外へと繋がる扉に向かおうとして、一瞬だけ立ち止まる。

（部屋のトイレ、使いたいです……音が出てしまうと、他の皆さんを起こしてしまいますね。階段を降りるだけですし、共用のトイレに行きましょう）

部屋の出入り口となる扉の手前にある木製の扉を開ければ、その先には寮室に備えられたトイレがある。決して短い付き合いいではないカノエ、ツムギ、レナの三人には今更排泄音を聞かれても恥ずかしくはないが、就寝中ともなれば話は変わる。寝ている人間を、大音量の排泄音で起こしてしまう恥ずかしさと申し訳なさが、部屋のトイレを使うという選択を躊躇させた。

覚悟を決め、エリは廊下に出る。真夜中の寮は足下を照らすための小さな光こそ点いているが薄暗く、人の影は全く見当たらない。人によつては恐怖すら覚えそうな廊下を、エリは小走りで移動する。まず目指す先は、下の階層へと繋がる階段だった。

（ゆっくり慎重に、お腹を刺激しないように……にゅんっ!）

……ブブブブビィッ! ふうううう……。

（うう、ちよつと我慢できませんでした……臭いもひどいですね）

着実に段差を降りようとするが、四階から一階まで、三フロア分の階段を降りなければならぬ。段数にすれば四〇段を大きく上回る段差は、どれだけ気をつけて降りたとしても、小さな気の緩みから尻の穴が緩んでしまう。

エリの肛門が開いてしまったのは、ちょうど二階と一階を繋ぐ階段の踊り場のことだった。周囲に広がり始めた強烈な腐卵臭を嗅いで顔をしかめつつ、ほんのりと顔を赤くしたエリが、やや急いで階段を降りていく。

ガス抜きをしたことで我慢が少し楽になった——と考えていられたのはほんの一瞬の話で、一階の床を踏んでトイレへと繋がる廊下を歩く間にはもう、エリの便意は再び癡猛さを取り戻していた。尻の穴が内側からの圧力でこじ開けられそうになり、出口のすぐそばまで降りてきた巨大な大便が漏れてしまいそうになる。

（うんこが漏れそうです……ご禁制の便秘薬とはいえ、これほど効果が強いとは思いませんでした。お腹が痛くて、もしかしたら下痢をしているかもしれません……）

ただの便意では説明のつかない痛みが、エリの下腹を支配している。出口を陣取った固形の大便と、その奥で行き場を失っている下痢便が強烈な痛みとなつてエリを急かす。エリの頭の中は、十数メートル先に迫った扉の奥にある便器を使うことではないだった。

（便秘ですし、やつぱり和式……いえ、お腹が痛いので時間も掛かりそうですから、洋式で座って済ませたいです）

真夜中のトイレはきつと無人だろう。混雑する時間帯に行くことと選択肢がないことも少なくないが、この時間であればエリに選択権があるはず。このお腹の痛みから予想される長期戦のことを思えば、座って用を足したかった。

トイレの扉が見えてきて、エリの表情に安堵が見え隠れする。途中でガスを漏らしながらも、エリは致命的なお漏らしに陥ることなく、目指すべき場所であるトイレへとたどり着いた。あとは扉を開け、その奥にある個室で気持ちよく大便をひり出すのみ。

「ふう………あ、れ？」

明かりが点いている。小さな違和感があった。

（誰もいないはずなのに………なんででしょう？）

センサー式の照明が点灯しているということは、誰かがトイレを使っているということ。……真夜中にわざわざ、部屋のトイレではなく共用のトイレを？

エリが胸に抱いた小さな違和感は、けれどもすぐに解消されることになった。トイレの中に入り奥まで進まずとも、閉まっている個室があった——奥側の二つ。洋式便器がある個室には、先客が入っている。それも、ただならぬ事情を抱えた先客だった。

「ん、くっ………はあっ！」

プブプリュプリュプリュビビビビブッ！！

「うぐうっ！ ううう、づっ！」

ブー——ッ！！ びちびちびちっ、どぼどぼどぼっ！

トイレの中ほどまで進むと、個室から漏れ出してくる臭いが鼻腔を刺激する。トイレの中に響き続けている音から容易に想像できる腐卵臭が、エリの顔をしかめさせ、次いで頬を赤らめさせる——思い出すのは、トイレまでの道中でガスを漏らししてしまったあの瞬間。階段の踊り場で放つてしまったガスと全く同じ性質の臭いが、トイレの中に充満しようとしていた。

（お二人とも、お腹を壊しているのでしょうか………洋式で座ってうんこを済ませたかったですけど、無理みたいです）

顔も名前も分からない二人の尻から響く音は衰える気配を見せず、扉の錠前に浮かぶ赤色が青色へと変化する瞬間はまだまだ先のことのように思われた。腹に手を当て、自らの我慢がその瞬間まで続かないことを悟ったエリは、和式便器へと目を向ける。

（一番手前……は廊下の方に音が響きそうです。かと言って真ん中の個室はすぐお隣に別の人がいますから……）

エリが選んだのは手前から二番目の個室だった。個室の中に入って鍵をかけ、二時間半ぶりに和式便器と向き合う。一つ隣の個室で向かい合った前回と位置関係は変わらないが、エリのお腹の中で起こっている現象には大きな違いがあった——絶え間なく響く腹からの蠕動音が、便意の存在感を示している。

和式便器を跨ぐ前に、エリはスカートの中に手を入れ、黒色のショーツを膝下……を通り越し、足首まで下ろした。右足、左足の順にショーツを外したエリは、それを軽く二つに折って個室内の小さな荷物置きの上に置く。エリにとって本当の臨戦態勢に入る前の、一種のルーティンのようなものだった。

「ふう……………」

ため息をつきながら便器を跨ぎ、エリはしやがみ込む。なるべく前方に足を置き、後ろへのはみ出しを気にせずに済む位置にしやがんだエリは、まずは尻にゆっくりと力を込めた。

ブブブブビィビィビィビィッ！ ブウ~~~~ッ！！

洋式トイレの個室から響く下痢の音とは対照的な、甲高く乾いた放屁の音が女子トイレの中に大きく響き渡る。直腸の中に溜まっていた大量のガスを外に出し、エリは少し気持ちよさそうな表情を浮かべた。けれどもすぐにまたエリの表情は歪む。ガスを押し出したことで、その上に溜まっていた巨大な大便がゆっくりと出口に向かって動き出していた。大腸の大きな蠕動運動が始まり、内側からの暴力的な圧力によって、出口がこじ開けられ始める。

「んんんっ…………… う~~~~んっ……………」

ぶりりりっ！ ビチヂチッ！ ぶうううっ！

エリが下腹に力を込めると、細切れにガスが飛び出していく。強い便意とは裏腹に、四日間大腸の中に溜め込まれた大便は、そう簡単には排泄することができない。長期戦になってしまふのはいつものことで、短い日でも十分、長ければ三十分ほどゆっくりと時間を掛けながらエリは排便をすることになる。

エリが長い戦いを覚悟し、お腹を軽くさすった、その直後のこと。ゴロゴロゴギョルルルルグウウウビィッ！

（……………?! お腹が、いつもとは比べ物にならないほど痛いですが……、もしかしてこれが便秘薬の効果でしょうか、うううっ）

けれども今日は、エリの体内で経験したことのない事態が発生していた。便秘の大便がようやく降りてきそうになったときには感じるここのない腹の痛みが、エリを必要以上に苦しめている。腸の蠕動運動の感覚も普段とは異なり、明らかに固形ではない何かが腸の中で暴れ回り、直腸へと降りてきているのが分かった。

ただ、それがどのような便意であったとしても、そこから逃れる方法はたった一つしかない。エリは壁に備えられた手すりをしっかりと掴み、下腹に思い切り力を込めた。

ブビビビィッ！ ブシュブウウウ……………み、ちっ！

放屁が続く。だが、その最後の最後に、出口である肛門は質量を持った何かによって堰き止められた。お尻の穴が内側から強烈な力によって押し広げられていくこの感覚は、エリがずっと求めていたもの。ピンク色の肛門の中央に、焦茶色の塊が顔を出していた。

(出そうになってきました、このまま一気に……っ！)

「ふううーっ！ んんん……っ！」

ニヂッ……ミチヂイッ、プブブウッ……ブウッ。

身体が本能的に息んでいた。広く足を開き、肛門を広げるためだけに全身の力を使う。四日間ずっと大腸の中に鎮座し、外に出ることのなかった宿便がようやく、外の空気に触れる。放屁を繰り返していたときは比べものにならない強さの臭いが、エリの臀部から伸びたわずか一センチほどの大便から発せられていた。

ゴロゴロゴロゴログリグリグリグリグリッ！

(お腹が痛いです……早く、うんこを出したい……)

下腹に感じる尋常ではない痛みが、エリを焦らせる。いよいよ肛門から始まった大便をひり出していくために、エリは再び大きく息を吸い込んで、尻の穴を開く。

ミチヂッ、ミチヂチッブブウッ！ ブリリリリイッ！！

ゆっくりと、けれども着実に、焦茶色の大便是長さを伸ばしていく。長さが五センチを超えたところでその太さは三センチに達し、エリの肛門は限界めいっばいまで広がった。赤く腫れ、盛り上がった肛門から、大便が伸び続ける。エリは荒く息を吐きながら、無心に尻の穴を開き続けていた。

「んん……んうっ！ はあ、はあ……」

ブビイイ……ッ！ ぶすつぶううう……。

だが四日間溜め込まれた大便の量は多く、硬く、そして長い。一度や二度息んだだけで出し切れるような代物ではない大便を宙にぶら下げたまま、エリは小休止を挟むことを余儀なくされた。体中が酸欠

になり、何度も大きく息を吸って酸素と二酸化炭素を交換する。未だに便器の底面には到達しない、長さ九センチの尻尾をぶら下げながら、エリは苦痛に満ちた表情を浮かべる。

グギルルルルルルッ、ゴロゴロゴロ……ッ！

それでも腹の猛攻は止まらない。数秒後には強烈な痛みと腹痛に耐えかね、エリは反射的に下腹に力を入れていた。再び尻の穴が開かれ、焦茶色から徐々に茶色へと変化しつつあった大便が、毎秒二センチほどのスピードで伸びていく。少量のガスが漏れ出すと同時に、エリの尻から粘着質な音が響いていた。

「ぬううう……んうう……っ！」

ブウウウッ！ プボッ、ネチッ、ミチイッ……

ムリュ、ブウウ……ニチチチ……ミチッ、ニチチチッ！

排泄が後半戦に入り、エリの息み声が大きくなっていく。すでに大便の長さは二〇センチを超えた。ここまで来ればもう止まることはない。そればかりか排泄は加速していく一方で、もはやエリ本人に制御できるものではなかった。

そして——エリが悶絶する中で。

ニチチチッ、ブモモモモモブリュブリュ——

「はあ、ふうっ、ん、……っ！」

——ブリュブリュブリュッ！ ブチチチチチチチチチッ

最後の五センチは、わずか一秒の間にエリの肛門を通過していった。エリの身体が小さく上下に振動している。息を切らしているエリの尻からは、もう尻尾が飛び出していることはない——つい数秒前までエリの身体の中に残っていた大便はもう、全てが便器の中にあつた。

太さにして三センチ、長さはおよそ二九センチ。和式便器の底面部分の中央を貫く巨大な大便が、エリの尻の下に横たわっている。便器前方の先端部分の焦茶色は、尻の真下に近づくにつれて薄い茶色へと変化している。四日間という時間を感じさせる大便が、エリの身体から生み出されたところだった。

ほっとしたのもつかの間——巨大な宿便を出し切った爽快感に浸ることができたのは、わずか三〇秒ほどのこと。大便を出す前よりも余計に強まった腹痛が、エリを現実へと引き戻す。

グギギギギギィーッギユルギユルギユルゴロッ！

（ううっ。お腹が痛いです……便秘薬のせいでしょうか、緩いうんこが押し寄せてくる感じが……）

エリが左手を手すりから離し、腹に当てる。大腸が絶えず蠕動を繰り返す振動を感じつつ、エリは衝撃が襲うその瞬間をゆっくりと待つ。波を打つ液体がゆっくりと直腸に流れ込み、重くなった直腸が肛門をこじ開け、液体が放たれようとする——不意に強烈な便意を感じた次の瞬間に、エリの尻で大爆発が起こった。

ブチュルルルルッピチピチピチピチピチブウウッ！！

泥のように溶けた軟便が尻穴から溢れ、噴き出し、便器の中に存在した白と茶色の境界線を塗りつぶす。太い一本糞の左右に広がっていく軟便と下痢便が、便器の中を数秒のうちに茶色く染め上げた。ただでさえ大きな大便をひり出した後だというのに、なおも大量の下痢便がエリの尻穴からは溢れ出す。

それでもまだ、エリの便意は止まらなかった——息を切らし、歯を食いしばって腹痛に耐えながら、エリは再び尻を開く。

プビュウウッ、ドボドボドボッ！ ぶちゆるるるっ……。

噴き出してくるものは紛うことなき下痢便だった。水を大量に含んだ未消化の大便が、滝のように便器へと叩きつけられる。尻の穴は茶色に汚れ、なおも下痢便とガスを同時に噴き出そうとするエリの尻からは、数度の爆発音が響く。その音は洋式トイレの方面から響く音よりも、エリの尻が空気中に曝け出されている分だけ大きい。

顔をしかめているエリは、感じたことのない苦痛に見舞われていた。出しても出しても便意が止まらない——どれだけ踏ん張っても大便が出ない普段の朝とは真逆の感覚。再び出口へと押し寄せてくる下痢便を絞り出すべく、エリが下腹に力を込めようとした、次の瞬間。

「あ、空いている……良かったあ……」

女子トイレの入り口の扉が開かれ、足音がトイレの中へと入ってくる。聞き覚えのない声の、エリの知り合いではない誰かが——けれど彼女が、真夜中にも関わらず複数の個室が閉まっていることなど気にも掛けず、まだ空いている個室が残っていることに安堵していた。足音がエリの左手——最も入り口に近い個室に入り、やや慌てて扉が閉められる。鍵がかかり、衣擦れの音がしがみ込んだ。

「ふうーっ………くうっ！」

ピチピチピチピチピチッ、ピチピチピチィーッ！

直後にはその個室からも、水っぽい下痢の排泄音が響き出す。その女子生徒もまた、お腹を壊していた——エリの尻から出ているものと同様の茶色い水が、彼女の尻からも噴き出される。

空いている個室は、今やたった一つとなった。深夜二時四十分という時間帯にも関わらず、第四寮の共用トイレでは、四人の女子がそれ

それぞれの便器に大便をぶち撒けている。この空間において同じことをすることが許されるのは、あと一人のみ。

そして、その個室も程なくして、利用者によって占拠される。

「え……？　まだ空いてる……ううう……っ」

グルグルグルゴポポポポポギョルルルビー——ッ！

バタバタと急いだ足音と、扉を隔ててもなお聞こえる腹の音は、すでにこの空間の中で聞き慣れた音になりつつあった。足音の主は最後の個室——エリの一つ右にある中央の個室に入り、鍵を掛ける。準備が整うとすぐに、その個室からも同質な音が響き出す。

「ううう……っ！　jはあ、間に合ったあ………ぐうっ」

プップウウウッ！　プビビビビッップチュブチュブチュ！

総勢五人の排泄が繰り返されている。全ての個室が使用中になっているこの光景が真夜中のものだとは、到底信じられるものではない。加えて、五人は全員例外なく、腹を下していた。エリも、その右でも左でも、或いは洋式トイレに座っている二人も、誰もが尻から下痢便を迸らせている。

ピチピチピチ……ぶうっ！　ぶちゅるるるっ、びちびちびちっ！

エリの尻が何度目か分からない爆発を迎えた。便器の中央で存在感を放っていたはずの野太い一本の大便も、今となってはもう下痢便の海に沈んだ同色の固形物に過ぎなかった。現在進行形でエリの尻から降り注ぐ茶色の雨が、便器の中に無数の飛沫となって飛び散る。

細かく開閉を繰り返す肛門が、エリの苦しみを何よりも物語っていた。エリが必死に気張る度に茶色に塗れた穴が開き、ガスと飛沫が合わさって飛び出していく。開き疲れて一度は窄まりかけた肛門も、そ

の状態は二秒として保たず、再び内なる便意によって開くことを余儀なくされる。エリは——いや、この場で尻を剥き出している誰もが、同じように苦しみ、同じように尻から下痢便を絞り出していた。

（いたた……これが、便秘薬の効果なのでしょうが……。というか、私以外の皆さんもお腹を壊しているみたいですが、他の人も便秘薬を飲んだ、とか……そ、そんなわけが……）

プチュブチュッ！　プビビビ……ぶりゅぶりゅぶうっ！

真夜中に共用トイレの個室が全て埋まる珍しさと、個室にいる五人全てが下痢をしている珍しき——それらに直面してもなお、エリは自分の下痢の原因が便秘薬だと信じて疑わなかった。腹に残っている大便を全て出し切れば腹痛から解放されて眠りにつくことができる。そう信じてエリはただただ、足下の便器に下痢便を注ぎ込み続けている。プリュプリュプリュ……ピチピチピチッ！

（ううっ！　まだ、出そうです……こんなにうんこが出るなんて）

出しても出しても、まだ便意が消えない——狂ったように暴力的な便意がエリを便器に縛り付ける。すでにしやがみ始めてからは十分近い時間が経過しようとしていた。徐々に足が痺れ、膝が委託なり始めていたが、なおも止まらない茶色の噴流を前に、エリはしやがみ続けることしかできない。

「んくうっ……はあ、ううっ」

「なんで、まだ……んあああっ！　うぐうっ！」

——プボボボボブリュッ！　ぶううう……ううっ！

——プビビビビビビビチッ！

苦しんでいるのはエリだけではなかった。どこかしらの個室からは

激しい排泄の音が響き、苦しみに喘ぐ息み声が聞こえてくる。誰もが腹痛という苦しみのさなかにあり、彼女たちはまだ誰一人として、その苦しみから逃れられていなかった。

それでも——トイレの外で起こり始めている大規模なトラブルは、容赦なくエリたちの周囲の環境を変えていく。

「……え、うそ、いったい……？」

「なんで、なんで全部使ってるのよ……」

「ねえ、どこも下痢してるっぽいんだけど……」

予想だになかった足音が、一人、二人、三人と連続して駆け込んできく。便器を使うために共用トイレへと足を運んだ彼女たちは、けれども目の前に広がる、五つ全ての扉が固く閉ざされた光景の前に、足が動かなくなっていた。

戸惑いながらも、個室の外にいる女子たちはやがて、目の前にある扉を順番に叩き始める。便器を乞い願う声とそれを拒絶する会話が繰り返され、やがてその声はエリの入っている個室へとやってくる。

——コンコン。

「あの……お腹が痛くて、代わってもらえませんか……？」

しゃがんでいるエリの真後ろにある扉が、控えめに、けれどもしつかりと二度、ノックされた。どこか慌てているその声は、主が腹痛に苦しみ、便器を——エリの足下にある和式の白い陶器を欲していることを示していた。

願わくばエリも、扉の外に佇む女子生徒に救いの手を差し伸べたかった。少しの腹痛であればエリも我慢して、この個室を別の誰かに譲る道を選んだだろう。

けれども。

「ごめんなさい……。私も、お腹が、痛くて……ううっ！」

ブッ、プビッピビピビピビピブウーッ！

言葉言い終わる前にエリの尻から茶色が進る。苦しみに満ちた呼吸音と、他の個室に勝るとも劣らない激しい脱糞の音が、エリの体調を物語っている。

エリは、どうしようもなく腹を壊していた。並の腹痛ではない強烈な痛みが引き起こした便意はまだ当分の間、エリを便器に縛り付けるだろう。立ち上がり便器から尻を離すことができるまでには、まだかなりの時間を要するのが明らかだった。

「うう……。そうですか……」

扉の外の少女がすぐごと引き下がる。他の個室でもすでに同じようなやり取りが行われたようで、それ以上エリの入っている個室がノックされることはなかった。

（こんなに多くの人がお腹を壊しているなんて……明らかに何か別の理由でお腹を壊している気が……。もしかして私も、便秘薬のせいじゃなくて、何か違う理由でお腹を……？）

エリの理性がようやく、ピンク色の錠剤以外の理由に考えを至らせる。お腹を冷やした、食べ過ぎた、何かの感染症……

（——まさか、集団食中毒、なんて訳ないですよ）

エリは小さく首を横に振り、再び手すりを掴み直す。

ぶじゅうううぶりぶりっ！ ブッブウウーッッ！！

エリの尻がぐわっと開き、甲高い放屁音が響く。

その音はまるで、地獄の始まりを告げる鐘のようであった。

3 板垣カノエ

ゴロロロロロッ……ギュルッ、グウウウッ……。

(おなか………いたい……)

ツムギが四百四号室のトイレで苦しんでいる頃、ベッドの下段に寝ていた板垣カノエは、下腹の鈍い痛みによって目を覚ました。徐々に覚醒していく意識の中で、カノエは左手を痛む腹に当て、状況を確認する——手のひらに伝わるゴロゴロという振動音と、尻の穴が熱くなっていく感覚は、紛うことなき便意であった。

(なんでこんな時間にトイレ行きたくなったんだろう、とりあえず、トイレに行かないとねえ……)

ゆつくりとカノエは身体を起こし、腹を刺激しないようにしながらベッドを降る。足音を立てないように、上段のツムギを起こさないように……と気をつけてベッドから離れたカノエは、振り返った直後に違和感を覚えた。

(あれえ……？ ムギちゃん、どうしたんだろう)

上段で寝ているはずの紡木の姿が見当たらない。もしかしてトイレだろうか——少し嫌な予感がカノエの頭をよぎる。早く部屋のトイレを確認したかった。

けれどもその前に。

「……レナちゃんも、目が覚めたのお？」

「えっ!? か、かかカノエ先輩!」

背後で聞こえていた物音と、やはり床に降り立った足音にカノエが

気づかないはずもなかった——体重の軽さを感じさせる足音の主は衣斐レナ。もう一つのベッドの上段で寝ている、やはりカノエと同部屋の生徒である。

「しいーっ……エリちゃん起きちゃうよお……?」

「え、エリ先輩も、トイレだと思うけど……」

「……およ?」

足音で背後の状況を感じ取ったカノエも、ベッドに寝ているはずのエリがいけないという事実にはまだ気づくことができなかった。改めてベッドの方を見てみれば確かに、下段で寝ているはずのエリもまたおらず、ベッドがもぬけの殻になっている。

つまり、今こうして向かい合っているカノエとレナの二人が、この部屋にいる人間の全てだった。

「レナちゃんも……トイレ、行くのお……?」

「そ、そうだけど……え、カノエ先輩も?」

「そうだよお……。じゃあ、先輩特権で、私が先に使っね……」

「え!? ちよっと、わ、私、お、おなか……つて、ちよっと! せめてジャンケンにしてっば!」

カノエがトイレ目的で目を覚ましていると知って焦りをあらわにするレナを尻目に、カノエは部屋のトイレの方へと向かう。その頭の中には、今見聞きした様々な情報が渦巻いていた——そして立ち止まって考えたところで、その謎は解けそうにない。

(ムギちゃんだけじゃなくて、エリちゃんも……でも部屋のトイレは一つだし、どういうことだろうねえ……)

答えを知るためには実際に部屋のトイレへと足を運ぶ以外にな

かった。トイレの扉の前に立つと、ドアノブに浮かぶ錠前が赤色になっているのが分かる——すなわちエリとツムギのうち、どちらかはトイレに入っているということになるだろう。

そのどちらがトイレを使っているのかは、すぐに分かった。

「はあ……………うつ」

ブジュルルブウッ。ビヂッ……ブビビッ、ドポポポポ……。

（この声は……ムギちゃんだねえ。それに、お腹を壊しているみたいな音もする……）

扉の前に立てば、いくら排泄音を抑えていたとしても、はつきりとツムギの尻からの破裂音が漏れ出してくる。肛門でガスが弾け飛ぶ小さな音と、便器の中に液状便が絞り出されていく音が交互に聞こえ、ツムギがお腹の調子を崩しているのはすぐに分かった。

（ムギちゃんがお腹を壊すなんて珍しい……）

ツムギはいたって快便体質である。朝のトイレを部屋のトイレで済ませることが多いオカルト研究会の部員であれば、概ね全員の体質は把握済みだった——エリは便秘気味、カノエは反対にお腹を下しがちそしてレナとツムギはお腹の調子を崩すことは減多になく、それ故に朝のトイレの順番待ちでは融通をする側になることも多いはず。

そのツムギがお腹を下していることに、カノエは微かな違和感を覚えた。言葉にできない嫌な予感が頭をよぎる——だが今のカノエで済むことは、そう多くなかった。

「え、カノエ先輩どうしたの……は、入らないの？」

「……今、ムギちゃんが入ってる。それに……どうも、お腹壊してるみたいだねえ」

今度はレナが顔を引きつらせる番だった。慌ててドアの方に視線を向ければ、再びツムギの尻からの排泄音が響いてくる。

ブチュブチュブビビッ！ ブウ~~~~ッ……ビヂッ。

紛うことなき下痢の音。普段のツムギからは全く想像のできない音を前に、レナもまだ状況の理解が追いつかない。

ただ、この場でレナとカノエが二人で立ち尽くしていても、状況が好転しないことだけは間違いないかった。このままツムギのお腹が落ち着くのを待っていても、時間だけが闇雲に過ぎ去って最悪は下着を汚してしまう結果を招くかもしれない。

カノエは右手を伸ばし、ドアをノックした。

——コンコン。

「ムギちゃん……お腹、大丈夫……？」

「え、カノエ先輩……？ も、もしかして起こしてしまいましたか？」

「ううん、そういうわけじゃないから大丈夫……トイレに行きたくて起きただけだから、ムギちゃんのせいじゃないよお……」

そして最後は、ツムギが驚く番だった——ツムギの排泄音が大きすぎてカノエが目覚ましてしまった訳ではないことをしつつ安心してたのも束の間、次の問題はカノエが順番を待っているということ。カノエが次に入り臭いを嗅がれてしまうこと自体は慣れているが、問題はそれ以上に、ツムギ自身の腹具合だった。

ゴジュルルルゴロゴロゴッ、ビィ~~~~ッ！！

（カノエ先輩……ごめんなさい……）

腹に手を当てて具合を確かめるが、大腸は今も激しく蠕動運動を繰り返している真っ最中だった。カノエと話をするために一時的に肛門

を引き締めてしまったせいで、出口を失った直腸にはどくどくと下痢便が流れ込んできている。重くなった直腸は校門をこじ開けようと市括約筋が限界を迎える未来はそう遠くなかった——そしてその腹が落ち着きを取り戻すまでには、まだ時間を要するに違いない。

「実はあ……私だけじゃなくて、レナちゃんもお腹痛そうなんだけどお……ムギちゃん、まだ掛かりそう……？」

「ちよつとカノエ先輩!?　なんで私がお腹痛いって」

「あれえ?　違ったのお?」

「あ、合ってるけど……いつ……?」

「あ、あの……お二人とも……」

普段とは違う光景——臆病なレナに対して悪戯心で絡むカノエの姿はいつも通りだったが、そこへツムギがおずおずと声を掛ける。二人の会話を少し離れて眺めている普段のツムギの穏やかな表情は、どこにも見られない。

扉を隔てた向こう側にいるカノエとレナに、ツムギは告げた。

「お腹が……すぐ調子が悪くて、しばらくは出られないです……」

「……………」

「……………」

その言葉が嘘でないことは、カノエもレナもすぐに悟ることとなる。

「……………」

ブリリリリリリビチビチビチビチビチッ!

とうとう、ツムギの我慢が限界に達した。限界を超えた圧力が肛門に掛かり、強制的に出口が開かれる。括約筋の力だけではどうにもならない圧力にさらされた結果、肛門は全開となり、今までとは比べも

のにならない勢いで下痢便を便器の中へと噴き出していく。高圧のガスが肛門で弾ける音も、液状の大便が激しく水面に飛び込んでいく音も、全ての排泄音が、扉の向こう側へと筒抜けになる。

「カノエ先輩……これは……」

「うん、当分ムギちゃんは代われなさそうだねえ。私たちは一階のトイレに行く」

この音を聞かされてしまえば、部屋のトイレが空くまで我慢するという選択肢は排除されたに等しかった。ツムギがトイレを出られるようになるまで何分か、何十分掛かるのか分からない。少なくともその瞬間まで——下り始めたレナとカノエのお腹は、耐えられそうになかった。

「お二方とも……本当にごめんなさい、っ!」

ブリリリリリリビチビチビチッ、ブビィー……!!

部屋を出て行く二人を、ツムギの尻から放たれた放屁音が見送った。

「私とレナちゃんが同時にお腹を壊して、ムギちゃんもあんな感じだから、きつとエリちゃんも……。いひひ、真夜中の秘術のせいで、私たちは呪われたのかもねえ……」

「ちよつと!?　私はやりたくないって言ったのに……もうっ!」

廊下を移動し、一階へと繋がる階段を降りていく二人の会話は、いたって普段通りだった。腹は痛むが、まだ便意も切羽詰まっておらず、共用のトイレに入れば事なきを得られる——そんな確信があった。だが、その二人が言葉を失う光景が、トイレには広がっている。

「これ、は……想定外、だねえ……」

「ねえ、嘘でしょ!? 何なのよこれ……!」

トイレの扉を開けるまでは軽口を叩いていた二人が、その中に一歩足を踏み入れた瞬間、言葉を失う——真夜中の共用トイレは、個室が五つ全て使用中となり、塞がっていた。

それだけではない。どの個室の前にも、一人か二人の女子が並び順番を待っていた。普段のように一列になって空くのを待つのではなく、それぞれが個室の前に並び、先頭の女子がそれぞれ絶え間なく扉をノックし続けている。

「並ぶしか……なさそう、だねえ……呪われたのは私たちだけじゃなくて、この寮全体だったのかなあ……いひひっ……」

「そうだけど、なんで……ねえこれ絶対私たちが夜中にやってた実験のせいだけじゃないわよね!? 食中毒か何かじゃないの?」

混乱しつつも、カノエもレナも目の前にできている列を選んで並ぶほかになかった。奥の三列には二人、手前の二列には一人が並んでいる。二人とも列の短い和式トイレを選び、レナが手前から二番目の個室、カノエが一番手前の個室にそれぞれ並ぶ。

「ぎゅるるるっ、ぐうううっ、ごろごろごろ……っ

(うんこ……かなり、したくなってきた、かも……)

お腹を軽く押さえながら、カノエは腹具合の把握に神経を集中した。手のひらには想像していた以上に激しい大腸の蠕動運動が伝わってきており、一方で尻の穴にはすでに強烈な便意の圧力が掛かり始めている。重くなった直腸を支え続けられる時間は、さほど長くはなさそうに思える。

カノエの前に並ぶ女子は、カノエ以上に焦っているように見えた。時折足踏みを繰り返し、常に右手をお腹に当ててさすり続けている。カノエと同様にお腹を下し、便意に苦しんでいることだけは間違いなかった。

その左手が、目の前にある扉へと伸びていく。何度目になるかわからないノックだった。

——コンコンッ!

「ねえ、まだあ……?」

ゴロロロロロログユルルルルッ!

カノエの耳にもはつきりと届くほどの腹の音が、彼女の蠕動運動の激しさを物語る。直腸に下痢便が流れ込み、肛門を締め上げようとする括約筋は震えながら必死に出口を閉じ続けているのだろう。身体をもじもじとさせ、少しでも腹圧を逃がす体勢を探り続けている彼女が絞り出す声は、限界そのものだった。

「ごめん……まだ、無理い……ううっ!」

ブチュルルルル、ピチピチピチ……ブボボボボッ!

だが、個室の中から聞こえる排泄音もまた、極限状態である。必死に返事を返したその直後に聞こえてきたうめき声に被さるように響いた排泄音は、四百四号室のトイレでツムギの尻から響いていたものと全く同質な音。

いや——よく耳を澄ませれば、カノエが並んでいる個室だけではなかった。その隣も、さらにそのまた隣も……五つの個室全てから、激しい下痢の排泄音が聞こえてくる。五人の先客は全員、ひどくお腹を下していた。

——ブビツ、ビチビチ、ビュルルルルッ！　ビチビチ……。

——ブビビビビビビッ！　ブチュルルル、ブウ~~~~ッ！！

（これは、とんでもないことになったねえ……どうしようか……）

五つの個室全てで下痢をしており、先客が出てくる気配が全くないとは、カノエも全く想像していなかった。カノエ自身も、並んでいる個室の先客と、前に立つ女子生徒が用を足し終えるまで我慢、と言いたいところだったが、そのようなことができる状況ではない。

ギュルギュルウーッ！　グルルルル、ゴボゴボ……ッ！

（うんこが出そう……このままじゃ、我慢できなくなる、ねえ……）

カノエの腹は着実に下り始めていた。大腸が蠕動を繰り返して、水分を十分に吸収していない下痢便の出口の方へと押し出している。小さな体躯に相應しい容量しか持ち合わせていない直腸はすでに下痢便とガスでパンパンに膨らみ、これ以上下痢便を溜め込むことなどできる状況にはなかった。

それでも大腸の動きが止まることはなく、狂ったように下痢便が生み出され続け、その全てが直腸に流れ込もうとしている。一刻も早く出口を開けると直腸は下に向かって垂れ下がり、肛門括約筋を執拗にこじ開けようと叩き続ける。

「ううう、うう~~~~っ！　早くうう……！」

前を見れば、先頭に立つ女子がなお一層苦しげな声を上げながら、先客の排泄音が止まるのを待ちわびていた。お腹をさすり、お尻を後ろに突き出して少しでも圧力を逃がしながら、懸命に便意を我慢しようとしている。その奥に大量の下痢便が待っていることは言うまでもなく——故にカノエに順番が回ってくる時間は、読めなかった。

（ここに並んでも、ダメそうだねえ……後は知っているトイレというと、外の、あの場所くらい……）

確実に我慢の限界が迫ってきている。だが、このまま寮内の共用トイレに並び続けていても、便器にありつける可能性は低いだろう。動けるうちに、別のトイレに行かなければならなかった。

二年以上もの長い時間を過ごしたこの学院で、カノエが使ったことのあるトイレはあちこちにある。その中で第四寮からほど近い場所にあり、かつ夜中であつても使うことのできる建物にあるトイレは、限られていた——カノエの頭脳は、程なくしてたつた一つの「正解」へとたどり着く。

（裏手にある湖のそばにあるトイレなら……間違いなく空いていそうだねえ。個室、一つしかないけど……）

カノエは横を向き、自分が並んでいるすぐ横の列に並んでいる、可愛い後輩の姿を見る。レナもまた便意に苦しみ、腹痛に悶え、崩壊しそうな肛門を必死に括約筋で締め上げている最中だった。表情からは余裕が一切失われ、やはり未だに空かない個室の扉を見つめ続けているレナは、可愛らしくも、可哀想という感情が勝る。

叶うことならば、レナも助けてあげたい。だが同じくらいに、自身自身の便意もやはり、然るべき場所で開放したい。この二つの要望のうち、今のカノエに叶えられるのは、どちらか一つのみだった。

（レナちゃん、ごめんねえ……）

心の中で謝り、腹をさするその手を止める。ちょうどトイレへとやってきた二人の女子と入れ替わるように、カノエは、共用のトイレを飛び出した。

4 衣斐レナ

カノエが飛び出していったトイレに残されたレナは、一人列に並びながら、大便を我慢している。カノエと同様、レナの直腸にも下痢便が溜まり、下へと伸びていく直腸が校門をこじ開けようと圧力を掛け続けている。レナはスカートの奥で尻を細かく震わせながら、肛門を精一杯の力で締め上げていた。

ぐぎゅるるるるうっ、ごろごろびいーっ！

(ウンチ漏れそう……なんでこんな時に限って混んでるのよ……)

レナが見つめる扉の奥にいる先客の尻からは、現在進行形で激しく下痢便が飛び散っているところだった。すでに下痢便の湖と化した便器の中に、新たな下痢便が降り注いでいく——その音が扉を越え、レナたち並んでいる女子の耳へと届く。苦しげな排泄音でありながら、けれども腹の中身を我慢することなく便器に絞り出すことができている先客の排泄音は、羨ましくて仕方がない。

——ブチュルルルルルブウウウッ！　ぶびびびびいっ！

(みんな、お腹壊してる……下痢のウンチの音があちこちから聞こえてくる……やっぱりこれ、食中毒か何かじゃないの……?)

レナの耳が一番大きく感じ取っているのは当然、列の先にある個室からの排泄音であるが、それ以外の個室からも同様の排泄音が響き続いていた。腹具合はどの個室の先客も似たようなもので、液体が弾ける音と、気体が爆発する音のどちらかが聞こえてくる。その音が止まりそうな気配は、未だにどこからも感じられない。

先客の排泄が終わらなければ、いつまで経っても次の人間にも、その次の人間にも順番が渡ることはない。終息するどころか弱まる気配すら感じられない排泄音にレナは絶望しつつある——それでもレナに残された選択肢は、そこに並び続けることしかない。

だがレナ以上に、その排泄音に絶望し、苦しめられているのが、レナの前に並ぶ女子生徒だった。地団駄を踏むように足踏みを繰り返し、しきりにお腹を押さえている彼女は、レナ以上に猛烈な便意を我慢しており、けれども限界に足を踏み入れつつある。尻の穴から時折響く水気を帯びた音が、肛門の耐久力を物語る。

ブ、ッ……！　ぶびっ　ビッ……ッ！

「はあっ、はあああ……っ」

レナの知り合いではない生徒だった。おそらくは別の専攻、そして別の学年だろう。だが下痢の便意に苦しめられているという点においてはだけは、レナと同じ状況である。そしてレナよりも前に並び始めている彼女は、レナ以上に便器を渴望していた。

ゴロゴロゴロゴロ……ゴボポポッ、グギィッ……！

そんな彼女が、レナの眼前で、激しい便意の波に襲われ始める。地団駄を踏む余裕すらなくなった彼女は、背筋を伸ばし、左手を尻に当ててまで全力で便意を我慢している——溢れそうな下痢を、持ちうる全ての力を持って堪えようとする。

——ドン、ドンッ！

「あの、まだ、ですか……ッ！」

それと同時に右手でドアを叩き、先客を急かす。便器を乞い願う彼女は、先客に運命を握られていると言っても差し支えないだろう。

だが——先客から返ってくる言葉は、非情だった。

「ごめんなさい……まだ、お腹が、痛くて……っ！」

ビチビチビチブルルウウウー……プリプリッ！

今にも消え入りそうな声で返事すると同時、先客たる少女は尻から大爆発を起こす。ガスと下痢便が入り交じったものが肛門で弾け飛び、個室を超えて女子トイレ全体に響き渡るほどの爆発音を奏でた。

「うう、ううう……っ……！」

彼女が悶絶している。トイレは未だに空きそうにない。だが肛門には限界を超えた圧力が掛かり続けている。一分一秒すら我慢できるか分からない彼女は、それでも最後まで決して希望を捨てることなく、目の前の扉の錠前に浮かぶ印が赤色から青色へと変化するその瞬間を待ち続けようとする。

けれども、極限状態の肛門は、総力で押さえつけたとしても、長く閉じ続けることが叶わなかった。

ビジュルルルルッ！

「……あつ、あぁっ！」

肛門から響く水音が、彼女の限界を物語る。その音を最も間近に聞いたレナが、目を背ける——寝間着の薄いズボンには、すでに言い逃れのできない茶色いシミが浮き上がっており、彼女が大便を我慢できなかったことを雄弁に示していた。

びぢびぢぢぢぢぢっ！ ブジュルッブウウウウ……プリリッ！

一度決壊してしまった肛門からの噴出は止まらない。

周囲からの視線に耐えかね、彼女はトイレを飛び出していこうとする——けれども、トイレの扉を開こうとした際に、とうとう。

ブジュウウウウビチビチビチビチッ！

「いや……あああぁっ！ 止まって……えええ……！」

先程までとは比べものにならない、ぐぐもった破裂音が彼女の尻から響き、茶色の汁が床へと垂れていくのが、レナからもはっきり見えてしまう——彼女の肛門は、本格的に決壊を迎えてしまった。僅かに下着を汚してしまっただけではない。下着のみならず下半身の衣服は全て例外なく再起不能な状態に陥り、下半身から便臭を放つ、尊厳を完全に失った人間に堕ちてしまった。

トイレを飛び出していった彼女の行方を、レナが知ることはない。だが点々と床に残された茶色の痕跡が、レナの前に並んでいた一人の女子生徒の存在を、確かに残し続けている。

そしてレナは、列の先頭に立つに至った。

（偶然だけど……せ、先頭だから、一人出てくれれば私もトイレでウンチができるわよね……誰か知らないけど、お願い早く……）

絶望的にすら思っていた状況に、僅かながら希望の光が差し込む。先頭に立ったレナは、先客さえ出てきてくれれば便器を使うことができる。二人が排泄を終えるまで我慢しなければならぬ当初の状況을 思えば、今の状況は、レナが下着を汚さずに済む可能性を僅かながらに残していた。

気にするべきは、先客の腹具合である。個室のすぐ前に立ち、先客の排泄音ははっきりと聞き取れるようになったレナは、改めて耳を澄ませて先客が放つ下痢の音を耳にする。

「んくっ……！ はあ、ふう……んっ！」

ブジュルルルルビチビチビチビチブウウウッ！！

(……あれ、この声って、まさか……?)

より一層大きくなつて聞こえる排泄音、ではなくレナはその声に引かかるものを感じていた。聞き覚えのある声、それも毎日耳にする、やや高音の声——思い浮かぶのは四〇四号室の住人。だがカノエはトイレを飛び出したきり戻ってきておらず、ツムギは今も部屋のトイレで腹痛に苦しんでいる。

レナの頭の中に残ったのは、特徴的な三角帽子だった。

「……ねえ、エリ先輩!」

「っ!? え、レナちゃん……?」

ブジュルルルブビィ~~~~~ブジュ、ブリリッ……。

排泄が止まり、意識を全て個室の外に引っ張られるくらい、レナの声は個室に響き、そして先客——もとエリは動揺を見せた。精一杯後ろを振り返り、そしてエリは声を繋ぐ。

「レナちゃん、今どこのトイレにいるんですか……?」

「トイレになんて入れてないわよ……! 色々あつて今エリ先輩のトイレの前に並んで、出てきてくれたら私が、入れて……っ!」

グギギギギギギルルルルッ、ゴロゴロゴォーっ!

急に喋ったことが刺激となつたのか、レナが表情を歪めてお腹を抱え出す——遂にレナも激しい便意に苦しめられ始めた。身体を揺らし、尻の穴に意識を集中して塞ぎ続けていなくては、いつ決壊してもおか

しくないほどの猛烈な便意。他の個室で列の先頭に立つ女子と同じように、レナも限界の二文字が脳内にちらつき始める。

「お願い先輩、急いでっ、私もウンチ漏れちゃうっ……!」

「ええっ!? そ、そう言われても、私も、お、お腹、んぐうつつ!」

ブジュブジュブジュビビィーっ!! ビヂビヂビヂッ!

すでに一五分以上しゃがみ続けているエリの尻からは、それでもなお下痢の排泄が止まらなかった。

第二章 特殊交易部・寮監隊

1 桜井ミヨ

——リッちゃんまだ!? 私そろそろ限界かも、っ!
——待ってよ、ボクだってまだ……うっ!

深い眠りについているはずの午前二時四十五分。桜井ミヨの意識を覚醒へと引きずり込んだのは、同じ部屋の中に響く二人の声だった。
(まだこんな時間なのに……何の騒ぎですか……?)

眠い目をこすりながら枕元の目覚まし時計を確認して、ため息をつく。遠目に聞こえるリツの声に比べて、明らかにミヨが目覚ます原因となったのはフユの声だろうか——フユに対する怒りの感情がふつふつと沸いてくるのを感じながら、ミヨは伸びをした。布団の中で身体を伸ばし、壁の方をむき直して再び眠りに落ちようとした。

——ギョルツ

その、次の瞬間のことであつた。

ゴロロロロロギョルギョルギョルピーーっ!!

「……っ!? うう、……っ!」

違和感を覚える暇すらなく、直後にはミヨは強烈な便意を催し、反射器に右手を下腹に回していた。布団の上でうずくまり、突如として傷み始めた腹に手を当て、様子を確かめる——ギョルギョルという激しく高頻度な振動と、それに伴い増幅していく痛み。何より、尻の穴が熱くなるような、激しい便意。

——桜井ミヨは、お腹を下していた。

(なんで、こんな時間に……。ううっ、今はとにかくトイレに行かないと。朝までなんて到底我慢できそうにありません)

尻の穴に掛かる圧力は強烈で、ミヨにそれ以外のことを考える余裕を一切与えてくれない。便意のことで頭がいっぱいになり、とにかく便器に座ることしか考えられなくなってしまうたミヨにできることは、ただ一刻も早く起き上がってトイレへと行くことのみだった。

幸いなことに各部屋にはトイレが一つずつ備えられており、もちろんミヨの生活する四〇二号室においてもそれは例外ではない。毎朝のようにフユ、リツを含めた三人で大きい方を済ませるための順番の争奪じゃんけんを行っているそのトイレこそが、今のミヨが目指すべき目的地だった。

急ぎつつ、けれどもお尻の穴を刺激しないようにしながら、ミヨは起き上がる。二段ベッドの上段に寝ていたミヨは、慎重に梯子を下りて地面に降り立った。身体を翻し、部屋の出入り口のすぐそばにあるトイレを指そうと——

「……フユ? なんで、そこに……?」

「あ、ミヨごめんね、起こしちゃった? さっきからお腹痛いんだけど、リッちゃんもお腹壊してるみたいでトイレ全然出てきてくれないんだよね……ううっ、お腹痛い!」

寝ぼけた頭では全く処理できていなかった、フユとリツの会話の意味を、今更になってミヨは理解し始めた——あの騒ぎ声は、フユがトイレの順番を懇願している声だったのだ。

そして、そのトイレの中には。

「あれ、ミヨちゃん……ミヨちゃんもお腹、痛いの……？」

プジュプリプリプリビザッ！ プビィッ！ プウ~~~~

普段の澀刺とした声とは打って変わって、苦しみに満ちた小さな声を返してきたのは、やはりリツだった。トイレの錠前に浮かぶ赤色とその扉の奥から聞こえる断続的な水つぽい音が、リツが今何に苦しめられているのかを物語る。

「さっきからずっとこんな感じなんだよ……も、漏れそう……」

ゴロロロロロギュルグウウウビィ~~~~ッ！！

そして、閉ざされた扉の前でしきりにお腹をさすり続けているフユもまた、何に苦しんでいるのが明らかだった。時に身体をくねらせ、時にはミヨの視線すら気にせずにお腹やお尻に手を当てているフユは、必死に大便を我慢している。

いったいどれほどの間、苦しめられているのか——そんな質問はもはや愚問だった。明らかにフユは限界寸前まで追い詰められている。常に余裕があるように振る舞っているその表情はゆがみ、ミヨが見たことのないほどに追い詰められたその仕草の前に、ミヨは何の言葉も紡ぎ出すことができなかった。

「そういえばミヨはどうしたの？ 起こしちゃったならごめんね、とはいえ私も我慢できなくて……」

お腹をさすりつつも申し訳なさそうに告げるフユの前に、ミヨも言葉が見つからない。だが、ミヨの身体の中でも確実に腹は下りはじめ、ゴロゴロという鈍い音とともに尻の穴に掛かる圧力が増大しつつあった。フユほどではないにせよ、ミヨもまたそう遠くない将来、限界を迎えることとなるだろう。

——実は私もお腹が痛いんです。先に入れてもらえませんか？

（……なんて、言えるはずもないですよ。フユだってかなり辛そうにお腹が痛いのを我慢しているんです。私だってうんこがしたいですけど……先に入る権利があるのはフユですよ）

そもそも、先に入れて欲しいとお願したところで、フユが実際に順番を譲ってくれるかすら怪しいだろう。そして仮にフユが先を譲ってくれたとして、その言葉に甘んじてゆつくりとトイレに座って気の済むまで下痢便を絞り出すことができるほど、ミヨも図太い神経を持ち合わせているわけではなかった。

部屋のトイレは使えない。かと言って、リツが用を済ませ、さらにはフユのお腹がスッキリするまで我慢を続けることは不可能。だがこのまま無様に限界を迎えることだけは、避けねばならない。

（頼るべきは、寮の共用トイレですね。夜中の廊下は薄暗くて少しだけ怖いですが……漏らすのに比べれば、マシです）

ミヨのことを気にする余裕もないのか、すぐにまた扉の方を向き直って細かく足踏みをしているフユに向かって、ミヨは一言。

「……起きてしまったついでなので、少し夜風に当たってくださいね」欲望を押し殺したその声を言い残して、ミヨはその場を立ち去る。やや不思議そうな顔をしてミヨの後姿を見つめるフユの方を振り向かないようにしながら、ミヨは扉を開けて廊下へと出た。

消灯時刻の十二時を過ぎた寮の廊下は暗く、足下を照らすフットライトが点灯しているのみで、先の見えない闇が広がっている。数メートル先の様子すら確認できない環境に小さく恐怖を覚えつつも、ミヨは急ぎ足で廊下を端まで移動し、階段へと到達した。

足下を見るのがやっとの廊下に比べれば、明るめに電気の点灯している階段を降りていくのは随分と気が楽だった。三フロア分の階段を降りるには多少の時間を要するが、ミヨは早速で一階を目指して移動を続ける。

グルグルグルグルギューウウウツ、ごろごろごろごろっ！

(まずいですね……さつきよりもお腹が痛くなってきました……。早くトイレに行かないと、うんこが漏れるかも……)

ただ心配なのは、ミヨ自身の腹が想像していたよりも酷く下っていることだった。下腹の痛みに加えて、尻の穴に押し寄せてくる下痢便は量が増えていき、熱いものが確実に出口のそばに溜まり始めている。段差を一步一步降りる度にうっかり開いてしまいそうになる肛門を、ミヨは意識してしっかりと締め続ける。

一階の床を踏む頃には、ミヨの顔色は確実に悪くなっていた。思い出すのはフユの姿——お腹をさすり、尻を押さえる、あれほどまでに情けない姿は見たことがない。大便を我慢するというだけで人目をはばかり仕事をしなければならないフユの後ろ姿が、不思議にもずっとミヨの意識の中に残り続けている。

(もうすぐ共用トイレですね……あそこまで行けばもう、こうして頑張って我慢をする必要もないですから)

徐々に我慢が辛くなってきたミヨにとって、一階の廊下は短くも長いものだった。扉の隙間から光が漏れ出しているあの部屋が、共用のトイレである。ミヨの目的地は、すぐそこにあった。

(……あれ？ でもなんでセンサー式の照明が点灯して……)
扉を開く寸前に覚えた、微かな違和感。扉を開いたミヨは——

「……っ、はあ、ふううっ……………」

「うぐうっ！ お腹痛い……ッ！」

「はあ、うう……っ、くっ」

——目の前に広がる想像だになかった光景を前に、言葉が出なくなっってしまった。

「……………。ど、どういう、ことでしょうか……？」

やっとの事でミヨの口から飛び出したのは、困惑の言葉だった。

けれどもそれは、無理のないことだった——五つある個室にはすでに先客が入っており、錠前に赤い印が浮かんでいる。それだけであればまだミヨも受け入れられたが、問題はその手前。数名、では収まらない人数の女子生徒が、誰一人として例外なくお腹を押さえながら、個室が空くのを一列になって律儀に待っている。

状況の理解は追いつかないが、列の一番後ろに並ぶほかに選択肢はなかった。最後尾に並んだミヨは改めて目の前にできた長蛇の列の人数を数え直す。その人数にして十四名——ミヨも含めて十五名。その全員が、誰一人として例外なく、お腹を押さえている。身体を振らせている者、絶えず足踏みをしている者、じっと苦悶の表情を浮かべてゆっくりと息を吐く者。

全員、大便を我慢していた。

(これだけの人数が、全員、うんこを……？ こ、個室の方はっ)

当然のように使用中になっている個室に、ミヨは意識を向ける。十四人の人間の壁を隔てた向こう側にある個室からの音を聞き取ることは難しいかもしれない。

そう思ったミヨの耳に入ってきた音は。

——ブブブブブリリリリリッ、ビヂビヂビヂッ！

——ブチュブチュッ、ブババババッ！　ぶびいいいっ……！

どの個室からの音が響いているのか分からない。あちこちの個室からの音が入り交じり、五重奏となつてミヨの耳に届く。だが個室の中の状況も、順番待ちをする女子たちと同じだった。誰もが例外なく腹を下し、洋式、あるいは和式の便器に下痢便を叩きつけている。水気に満ちた放屁の音と、下痢便が勢よく水面に飛び込んでいく音は、四〇二号室のトイレで聞いたリッツの排泄音と同じだった。

（個室にいる五人も全員お腹を壊していて、私含めて十五人がお腹を壊して順番待ち……こ、こんなことがあり得るのでしょうか……）

目の前に広がる光景は、どう考えても偶然で片付けてはいけないものだった。朝食後の時間帯ならまだしも、真夜中にこれだけの人数が同時にお腹を壊してトイレに殺到するのは、常識では考えられない。

ギルゴロゴロゴログウウウウグルピーイッ!!

（うう……。でも、今は我慢しないと……。は、早くトイレでうんこがしたいです……）

だが、この行列に並び自分の順番が回ってくるのを待つ以外に、ミヨにはどうすることもできなかった。お腹を押さえながら前に並ぶ女子生徒と同じように、右手をそつと下腹に当てながら、ミヨは行列が一步でも先に進むのを待ち続ける。

行列で前に並ぶ人数を思えば、四〇二号室に引き返してフユの後ろに並んだ方が先にトイレに入れる確率は高いだろう。だが、移動の最中にミヨの便意も酷くなつており、もう一度階段を上り四階まで戻るだけの余力は、すでにミヨの中には残っていない。

ミヨはじつと、自分の肛門に力を入れて締め上げる力を強める。直腸の中には絶えずどくどくと大腸から下痢便が流れ込んでおり、時間が一秒でも経過することに便意が強まっていく。軟便と下痢便で満たされた直腸が垂れ下がり、それを抑えようとする肛門括約筋は震えながら必死にミヨの尊厳を守っていた。

普段のミヨは至って快便な体質である。朝食後には規則正しい時間に便意を催し、四〇二号室のトイレで用を済ませる——もつとも、同じく快便体質のリッツと下しがちなフユがいるこの部屋では、我慢せずにトイレに入れる朝はそう多くない。どちらかが排便を終えるまで、時には二人とも排便を終えるまで我慢を続け、ようやくトイレに座ることができるともしばしばあった。

故にミヨも、多少は便意を我慢することに慣れている。尻の穴をしつかりと閉じ、足をびたりと合わせたミヨは、お腹をさすつて大腸を少しでも有めようとしながら、個室が空くのを待つ。

けれども、問題が二つあった。

（ううっ。お腹を壊したのも久しぶりですが、こんなに我慢するのが辛かったでしょうか……。下痢のうんこが漏れそうです）

まず第一に、ミヨ自身の腹具合が想像以上のペースで急降下していること。寝ている間は腹痛など一切感じなかったにも関わらず、そこからわずか十分ほどの間で、ミヨの腹は完全に下りきっていた。大腸が執拗に異常な蠕動運動を繰り返し、暴力的な便意がミヨの肛門を襲っている。ゆつくりと息を吐き静かに肛門を閉じ続けているミヨも、次第に尻を左右に動かし、身体をくの字に曲げようとする時間が増え始めていた。

(もう、並び初めて五分くらい経つのに、どこも空かない……お腹を壊しているといつても、ここまで変わらないものでしょうか)

だがそれ以上に大きな問題は、未だにどの個室からも水の流れる音がしてこないことだった。ミヨが並び始めてから、どの個室からも先客が出てくる気配はまるでなく、腹を押さえた十四人の生徒が徐々に限界へと追い詰められていく姿が目映るのみ。

朝の時間帯でも、これだけの時間が経てば個室の一つや二つは水が流れ列が進んでいるだろう。だが今はそのような気配すらなく、代わりにミヨの後ろに数名の女子生徒が並び、やはり困惑している。

この場で便意を我慢している女子の数は、すでに二十人を超えようとしている——異常事態が発生していることに疑いようはない。ミヨは残された理性で、この不可解な状況をなんとか理解しようとする。(偶然お腹を冷やした……にしては偶然が過ぎますね。胃腸炎などの感染症もあり得ないわけではないですが、それにしてもタイミングが重なりすぎています)

頭に浮かんだ可能性を一つ一つ潰していく。だが考えても考えてもこの状況を矛盾なく説明できる理由に思い当たらない。

——いや、一つだけあつて欲しくない可能性を、ミヨはまだ検討していない。だが他の可能性が潰されていくという事実は、間接的に、その最後のシナリオの可能性が高まっていることを示していた。

(これは、もしかして……この寮で、集団食中毒が発生したのでは)

ミヨがその可能性を頭に明確に思い浮かべた、そのときのこと。

「うううっ! もう我慢できないっ! お願い代わってよおっ!!」
ぶりぶりぶりりりりぶう~~~~っ!

行列の先頭に立っていた女子生徒が、他の誰よりも苦しそうな声を上げながら個室に向かって突進していく。尻から数秒間にわたり響いていた情けない音が、彼女の限界を物語る。

——ドンドンドンッ!!

彼女は最も手近な和式トイレの個室のドアを叩いていた。左手で尻を押さえ、右手で扉を力一杯ノックする彼女の様子を、その後ろに並ぶ多くの女子が見ている。もちろんミヨも例外ではない。限界寸前の彼女の要望に応じ、個室が空けられるかどうかによって、その後の結末が変わってくる——ミヨは直感的に理解していた。

個室からの返事はすぐには返ってこない。ピチピチという弱々しい破裂音が数秒間響いた後、やがてその音はにわかに途切れる。その後が続くであろう声を、彼女は尻を押さえたまま固唾をのんで待ちわびていた。精一杯の懇願が叶うと、彼女は信じていた。

だが——現実とは違う。

「ごめん、なさい……まだ、お腹、ゴロゴロしてて……ううっ!」

ブボボボッ、ピチピチブウッ! ブボビチャッ、ブウッ!

「我慢しようと思ったけど、ダメで……もう少し待って……」

排泄音の中断は、その後の大爆発の前兆に過ぎなかった。すでにトイレの中で十分以上排泄を続けているとは信じがたい大きな脱糞音が再び個室から響きだし、会話は強制的に中断される。

彼女が一步、その個室の前から後ずさる。すぐ隣にある個室をノックするかも思われたが、彼女の足は動かない。立ち尽くしたままじっと、何かに耐えるような相好を浮かべていた彼女が、にわかに身体をぶるりと震わせた、その直後だった。

「もう……無理……っ」

寝間着姿の彼女がゆっくりとしゃがみ込んだ瞬間、その尻からくぐもった音が響き出す。それが何を示すのか——もはや説明するまでもない。

ぶりゅぶりゅぶりゅっ……びちちちちっ、ぶびびぶううっ！

尻の部分が膨らみ、ゆっくりと茶色に染まっていく。左手で押さえていた尻から茶色の汁が垂れていく光景を、彼女の後ろに並ぶ多くの女子が見ていた——そして戦慄する。彼女の姿は特別なものではない。いつ、次なる自分の姿となってもおかしくない光景が、すぐ前に広がっている。このまま個室が空かなければ漏らしてしまう、という当たり前の事実を、女子たちは認識する。

ミヨも例外ではなかった——腹に手を当て、自らの限界を探る。

ゴロロロロロギユウウッ……ぐるるるるるっ……。

（どんなお腹が痛くなってきた……あまり長くは我慢できないかもしれないません……このまま並んでいても……）

異常なペースで進んでいる大腸の蠕動運動は、時間が経過しても、或いはミヨ自身が必死にお腹をさすっても、その勢いが全く衰えていなかった。すでに満杯近い直腸に新しく下痢便が流れ込む度に、ミヨの便意が強まっていく。ショーツの内側、ピンク色の肛門はすでに何度も震え、いつ決壊を迎えてもおかしくなかった。

我慢をすればトイレに入れるということを信じて並び続けてきたミヨも、トイレが一つも空かない光景を見せられてしまえば、小さな希望も潰えてしまう。求める白い便器は、例えこの場所に五つあっても、それがミヨの元に来るまでには、相当の時間を要する。

ゴポポポポポポポッ、ギユルギユルギユルびい~~~~っ！

にわかにミヨの便意が強まる。尻の穴を必死に締めて対抗しても、内側からの瞬間的な圧力は遙かに強烈だった。ほんの小さく、一瞬だけ生じた隙間から、直腸の内容物が噴き出していく。

ぶしゅっ、ぶりりり……ぶうっ！ ぶり ぶりっ ぶすっ！

「ひっ……！」

ミヨの顔が強張る。この瞬間にミヨの肛門は決壊を迎えていたとしてもおかしくはない。ショーツの布地の中に生暖かい何かが広がっていき、背中に冷や汗が垂れる——だが幸いにも、その生暖かさは数秒の後に空気中へと霧散していった。ミヨの尻から噴き出したのは、直腸の先端部分に溜まっていた熱いガスのみ。気体を外に出したことで、ミヨの我慢は僅かに楽になる。

もつとも、その代償は決して小さなものではない。ミヨの身体に纏わり付くように上がってくる腐卵臭は、紛うことなきミヨの腸内から生み出された臭気だった。トイレから漂う下痢の臭いと全く同質なガスが、ミヨの腸内に溜まりつつある。中々消えていかない濃厚な気体は、ミヨ自身が顔をしかめるほどに臭かった。

（おなら……が出ただけで済みましたけど、次にどうなるか。このまま待っていても、絶対トイレには入れません。動けるうちに動いて、少しでも空いているトイレを探さない！）

放屁により悪臭を周囲に撒いたことと引き換えに、ガス抜きを経てミヨの肛門に掛かる圧力は一時的に和らいでいる。次にまた便意の波に襲われてしまえば、今度こそ耐えられるか分からない——一刻も早く、ミヨは行動しなければならなかった。

後先を考えずに、動きのないトイレをミヨは飛び出す。未だに一人が決壊を迎えただけで、誰一人として苦しみから逃れられていない場所から逃げ出したミヨは、左右を見回した。

（トイレを飛び出しましたが、どこに行けば……。四〇二号室のトイレまで戻れる状態ではないですし、どこか階段を使わずに）

幸いなことに共用のトイレは一階にある。夜間の外出は禁じられているが、この際仕方がないだろう——加えてミヨは普段着のままである。夜遅くまで執筆作業をしていて、寝間着に着替えるのを面倒がってそのまま寝てしまったのが、少しだけプラスに働いた。

寮の外に視界を広げれば、使うことのできるトイレは多い。残るファクターはただ一つ、ミヨの腹具合と肛門がいつまで耐えられるかどうかだった——慎重に腹に手を当て、様子を探る。絶えずゴロゴロと音が響いているお腹では、我慢は保って五分ほどだろうか。

この第五寮から歩いて五分の範囲内で、トイレのある場所。本館に行けば確実にトイレはあるが、入口まで大回りをしなければならぬから時間が掛かる上に、寮監隊の本部があるので事情を説明しなければならぬだろう。より手近な芸術情報館にもトイレはあるが、真夜中には間違いなく施錠されているはず。

ミヨの頭の中に浮かんできた案は、残り一つ。

「裏手の湖沿いに……小さいですが公衆トイレがあったはずですよ」

それは普通のワイルドハント生であれば滅多に行くことのない場所だが、一部の生徒——特殊交易部と何度も取引したことがある生徒であれば、足を運んだことのある場所。寮監隊には監視されやすい湖沿いだが、何度も取引を重ねた相手に対しては、寮監隊の裏をかく目

的で時折使うことがある。そんな湖沿いにある唯一の建物が、小さな公衆トイレだった。

外部から仕入れた品物を渡した帰りに、ミヨも何度か利用したことがある。公衆トイレでありながらも手入れは行き届いており、雰囲気は寮の共用トイレに近く、趣もある。欠点は和式トイレの個室が一つしかないことだが、この場所のトイレに思い当たる人間はきつとミヨを除けば誰もいないだろう。

（間違いなく穴場のトイレですね。あそこまでならなんとか……我慢できそうです）

ギョルギョルギョルゴロゴロゴロピーーッ！

再び唸りだしたお腹をさすりながら、ミヨは第五寮を飛び出した。真っ暗な地面を照らしてくれるのは街頭、などではなく地面から生えた電球のような謎の物体が放つ光。カラフルな光を放っていたり、不規則に色が繰り返されていたり芸術性に溢れた明かりが、ミヨを湖沿いの道まで連れて行ってくれた。

湖が見えてくれば後は公衆トイレまでの数十メートルを走り抜けるのみである。外は思ったよりも寒く、風が身体に当たる度に体温が下がり、腹が悲鳴を上げた。便意の波がミヨを襲い、一度立ち止まりそうになる——だがミヨは足を止めなかった。

（ここで立ち止まってしまえば、絶対に我慢できなくなります……）

便意の頻度が再び上がり始めている。波を押し返し続けることがなくなり、弱い波と強い波が交互に繰り返されるようになってきた。いよいよ限界が近い——そう感じたところへようやく、公衆トイレの建物が見えてくる。ミヨは思い切り扉に手を掛け、その手を引いた。

——ガタンッ！

「……あ、あれ？」

扉は動かない。男女共用ながらもシンプルな構造のこのトイレは、扉を引けば目の前に和式便器がミヨを待っていてくれるはずだった。だが木製の扉は、何度引いてもびくとも動かない。

（このトイレ、内開きだったでしょうか……）

記憶違いかもしれない。ミヨはもう一度ドアノブを握り、今度はそれを押し込んで扉を内開きの方向へと押す。

——ガタンッ！

やはり扉は動かなかった。鍵がぶつかる金属音がするばかりで、開くはずの扉は動かない。押しても引いても動かない扉の前に、ミヨの頭に最悪の可能性がよぎる。

「ま、まさか………」

ドアノブの中央にある錠前を確認する。知っている生徒の方が少ないこのトイレであれば、例え共用のトイレが混雑したとしても誰かが来ることはなく、空室となっているはずだった。

——だが、錠前に浮かぶ印は、赤色。

（そんな……ここも、誰か……？）

ミヨの目から光が失われていく。このトイレはミヨにとって最後の希望だった——四〇二号室のトイレは同室の二名によって占拠され、共用のトイレは寮生が使用中でいつまで待っても自分の番が来ることはない。最後の可能性を託してミヨは寮を飛び出し、寒さに冷えるお腹を抱えながら必死にここまで耐えたのである。

それでも——このトイレにも、先客がいた。

——お願いします、代わってください！ お腹が痛くてうんこが漏れそうなんですっ!!

そう叫ぼうとした、次の瞬間のことだった。

「入ってる……ごめん、誰かなあ……？」

個室という空間の中に響く、やや低くスローペースな声。ワイルドハント芸術学院の中でも特徴的な声にミヨは聞き覚えがあった。

「その声……か、カノエさん……？」

「あ……ミヨ、ちゃん。どうしたの、そんなに慌てて……？」

板垣カノエ——ミヨとの個人的な付き合いはさほど長くないが、特殊交易部としての関わりは話が別。取引相手の中でも特に不思議なものをお願いされることが多いが、それ故にミヨもカノエのことをよく覚えていた。

そのカノエが今、ミヨの眼前にあるトイレに入っている。カノエがこのトイレにたどり着くのはさほど不思議なことではなかった。ミヨも何度もこの湖沿いでカノエと取引をした覚えもあるし、このトイレのすぐ裏を取引場所にしたことすらあった。

（そ、そんなあ……。カノエさんが……）

グギググウウウッ！ グギギギイイイイゴロゴロッ！

戸惑っている間にもミヨの腹はどんどん下っていく。下痢便が新しく直腸へと流れ込み、行き場を失った下痢便が暴れ回って強い痛みを引き起こす。異常な蠕動運動を繰り返す大腸の振動は、もうお腹に手を当てずとも感じ取ることができた。

とにかく、ミヨにできることはカノエにトイレの使用権を交渉することのみ。描けるシナリオなど何もなかったが、例え何も武器がなく

扉の向こうでは今も、カノエが腹痛と闘いながら腹の中身を絞り出している。だが扉の手前で行われているミヨの闘いは、カノエのそれより遙かに過酷で、苦しく、そして重大なものが懸かっていた。下着を汚してしまうかもしれない——高校生として、一人の女子として許されない境界線が、その先には待ち受けている。

だが、ミヨがどれだけハッピーエンドを願ったとしても、定められたシナリオはもう、パッドエンドに向かって一直線であった。月並みな「強い便意」という表現では事足りない尻への圧力が、ミヨの尊厳の崩壊するカウントダウンを開始する。

ゴロゴロゴロゴロッ、グギルルルルル……ッ!!

「くっ………んんっ………!」

ミヨも必死の抵抗をする。肛門を限界いっぱいまで引き締め、シャツを握るのみだった右手を肛門に当て、外からも肛門を閉じる力を加えてミヨは精一杯の我慢を続ける。極限のせめぎ合いが続き、行き場を失った液状の大便が直腸の中をぐるぐると動き回り、不快な痛みを下腹全体へと広げていく。

(お願いです………なんとか、我慢しないと……)

波をなんとか押し返さなければならぬ。肛門括約筋のところまで垂れ下がった直腸を少しでも上部へ押し返すことができれば、ミヨもまだ我慢を続けることができる。一分一秒でも、少しでも長く我慢を続けカノエが排泄を終えるまで、ミヨは待たなければならぬ。

だが——それは本当に可能なのだろうか?

カノエが用を足し終えて個室を出てくるまで我慢するなどということは、果たしてミヨの腹具合で本当にできるのだろうか?

「カノエ、さん………まだ、ですか………?」

「うう………んんっ! ミヨちゃん、ごめんね………っ」

ブリュブリュブリュビビィッ、ブボボボビチビチビチ……。

カノエの止まらない排泄音までもが、ミヨから精神力を奪い取っていく。あの和式便器の上でショーツを下ろし、尻を開いて腹の中で暴

れ狂う下痢便の全てをぶち撒けることが許されたなら——どれほどまでに幸せだろうか。カノエはその行為が許されている場所にしゃがんでいる。ミヨだけが、その尻を開くばかりかしやがみ込むことすら許されず、懸命に尻の穴を開かないように総力戦を繰り広げなければならぬ。

その闘いには終わりが見えなかった。便意の波を押し返しても、きつと数十秒と経たないうちにまた同じ強さの、或いはそれ以上の強さの便意の波が襲い来る。果たして疲れ切ったミヨの肛門にその波を耐え続けることは、可能だろうか。

(もう………無理………っ!)

ゴロゴロゴロォッ、グギルルルルルビィーッ!

まだ目の前の便意の波すら乗り越えられていないのに、大腸は容赦なく下痢便を直腸へと送り込む。直腸も、S状結腸も下痢便で溢れかえり、どこにも行けない下痢便が動き回る。内側からどうしようもない圧力を掛けられた直腸が、何度も何度も肛門括約筋をこじ開けようと下向きに垂れ下がる。

ミヨはもう限界そのものだった——トイレを飛び出す。外は真っ暗だった。周囲には草が生えているのみで、もうミヨのたどり着ける範囲に救いなどない。

「も、漏らすくらいなら……」

ミヨが便器にありつくことは不可能だった。だとすればせめて、身の回りの衣類だけでも汚す未来から逃れたい。街灯などない湖沿いの道でミヨが選択できる未来は、もはや一つだけ。

ミヨは草むらへと駆け込み、足を肩幅に開いた。

グギルルルルッ、ゴロゴロゴロロロッ……ぶびびびっ！

(もう、無理……っ！ 我慢、できません……っ!!)

肛門が決壊へのカウントダウンを始める。

——三。スカートを捲り上げて、ショーツに手を掛ける。

——二。白色のショーツを一気に膝下までずり下げる。

——一。そのまましゃがみ込み、露わになった肛門が地面を捉える。

「ふうううう……っ！」

——零。ピンク色の肛門が膨れ上がり、その中央から茶色の液体が勢いよく溢れ始める。不可逆な決壊が始まり、それと同時にミヨの腹痛は急速に和らいだ。

プビビビビビビビブリュブリュブリュブウーッ！

軟便、下痢便、そしてガスが混じり合った茶色の汚泥が、ミヨの尻から勢いよく地面に向かってぶちまけられる。尻の周囲を囲う高さ中数センチの草に当たった下痢便が、ガサガサと耳に残る音を奏でる。和式便器に叩きつけられる鈍い音でもなく、洋式便器の封水が跳ねる軽い音でもないその音が、ミヨに自身の行為を——下痢便を野に放っているという事実を突きつけた。

(やっちゃった、やっちゃった……私、私……っ！)

ピチブリュブリュブリュブリュッ！ びちびちびちびちっ！

腹痛が和らぎ、僅かに取り戻された理性がミヨの選択を責め立てる。その姿勢はカノエと同じく和式便器を跨ぐ体勢でありながら、けれどもミヨが今しゃがみ込んでいるのは、大便をすることが許されていない場所。その周囲には壁もなければ、その足下には下水道へと繋がる便器もない。

分かっていたが、便意をコントロールできるはずもなかった。狂いに狂った大腸は、ようやく出口が開放されたことに歓喜し、遠慮なく下痢便を出口へと追いやっている。直腸は空になることもなく、次から次へと押し寄せる下痢便を、ただただ出口に向かって押し出して便意というシグナルを脳に送ることしかできない。

「んんん……っ！ ううう……ふぐうっ！」

ブリリリリリリッ、ぶつびいいいいいぶううっ！

にわかに大量のガスが飛び出して、ミヨの尻から破裂音が連発する。周囲に加工物がない環境での放屁は、なんとも不思議な感覚だった。音が反響することはなく、ただただ放屁をしているという事実だけをミヨは認識することができる。

ガスが出ると、次は下痢便が押し寄せてくる番だった。体調の悪化しきったミヨの大腸は、もはやほとんど水分を吸収することなく大便を出口に押し出している。泥水、もとい茶色い水と化した大便が、ミヨの尻から勢いよく弾けた。

ピチュルルルブリブリブリリリリリブボボッ！

(ううっ、まだ出そう……っ！ 早く止まって欲しいのに……)

ブジュウウウブジュルルルルビヂビヂビヂヂヂッ!!

まとまった量のガスと下痢便を出すも腹圧が下がり、ミヨの感じる便意も僅かながら落ち着きを取り戻し始めていた。周囲を見回し、冷静になると自らの行為を改めて認識することになる。そして足下に目を向ければ、ちょうど道沿いに用意された街灯が、自分の尻と足下の下痢便の湖を照らしていた。直径十センチを超える湖が尻の真下に生まれ、飛び散った下痢便は放射状に地面に飛んでいる。

(何をやっているんでしょう、私……)

変わらず尻からは下痢便を迸らせながらも、三分ほどの間ひたすらに排泄を続けたミヨは、少しずつ冷静さを取り戻しつつあった。野糞に踏み切ってしまったという事実を噛みしめ、けれどもどうしようもなかったあの便意のことを思い返し、ため息をつく。

公衆トイレに人の動きがあった様子はなく、カノエは未だに個室の中に籠もっているようだった。たった一つの便器はまだしばらくの間空きそうにない。できればこのような場所からは早々に離れたいところだったが、個室が空かなければどうすることもできなかった。

ブジュルルルルビビビチッ！ ブブウ~~~~ッ！

(んうっ……。ある程度は治まりましたけど、まだお腹が痛いし、うんこも出そうですね……。もうしばらくはしゃがみつ放しでしょうか) 強烈な便意からは開放されたが、尻からは断続的に下痢便が飛び出し続けていた。大腸の動きが小康状態になっただけで、下痢便の産生が止まったわけではない。直腸には少量ずつ下痢便が流れ込み、ある程度溜まった下痢便は一気に肛門から放出される。しゃがんでいる分だけ、ミヨの尻は容易に開いた。

(それにしても、高校生にもなつてまさか、野糞だなんて……。誰にも見られていないから良いですが……)

野糞という恥ずかしい行為だが、周囲に誰もいないおかげで、ミヨの羞恥心は半減している。

「……ミヨ、ちゃん？」

「——ヒロミちゃん？」

だがミヨの描くシナリオは、想定外の分子を孕んでいるらしかった。

2 ヒロミ

(中略)

(うわ……。ミヨちゃん本当にすぐお腹壊してたんだ。私が見たときはちょうど最初の波を出し終わったところだったのかな)

——その音の全てを耳にしよう場所、ヒロミは立っていた。駆け込んでいったミヨを見送ったまでは良かったものの、ヒロミにはいるべき場所がない。この状態のミヨを置いて部屋を離れるわけにも行かず、かといって書類整理でもしようかと思ったが、ミヨの排泄音が響き続けるこの部屋では、気が散ってしまうのではない。

結局——ヒロミはトイレの前に立ち尽くしたまま、ミヨの排泄音の全てを聞いてしまっている。恥ずかしがるミヨの姿は容易に想像できるものの、それ以外にいるべき場所がヒロミにはなかった。

(ミヨちゃん、全部聞かれてたって知ったら顔を真っ赤にするだろうけど……。トイレを貸してあげた訳だし、お互い様ってことで)

ヒロミは一人で小さく微笑み、そして——直後。

——ぎゅるるっ。

(……。気のせい、であってほしかったんだけど。違うみたいだね)

ミヨが入っているトイレの扉を見ながら、そつと右手をお腹に当てる。スラックスの上からお腹を押さえ、腹の中に伝わっている振動を感じ取る。大腸が振動し、蠕動運動の波が少しずつS状結腸から直腸へ、出口の方へと近づいてくる——もちろん、ヒロミがこんな真夜中

に便意を催す体質の持ち主でないことは言うまでもない。

これは紛れもなく、イレギュラーな便意であった。そしてお腹の下の方に感じていたむずむずとした違和感は、次第に腹痛へと変化し、ヒロミの意識を侵食していく。腹が痛い、お尻が熱い——トイレに、行きたい。大便がしたい。

生理的な欲求が身体の奥から湧き上がり、便意となってヒロミ自身に認識されるまでには、そう時間を要さなかった

ゴロゴロッ、ギュルルル……ごろごろ……。

(まずい、お腹が……う、うんちが、したい……どうしよう、トイレに行きたいけど、ミヨちゃんが……)

身体が便器を欲している。使い慣れた洋式便器に座り、尻の穴をゆつくりと開いて腹痛を解消したい——だが、この部屋に備えられたヒロミだけの洋式便器には、ミヨが腰掛けている。扉を隔てた向こう側で、ミヨが尻を剥き出しにして、ミヨの腹の中身をぶち撒けている真っ最中だった。

ヒロミの日常生活において、トイレの我慢は限りなく無縁な存在である。朝のトイレは確かに混雑するが、一人部屋に住んでいれば話は変わる。ヒロミのためだけの便器に座り、後続を気にすることなく落ち着いて息み、健康な大便をひり出すための時間が存在する。その時間を邪魔するものは存在せず、故にヒロミは、大便を我慢した経験がここ二、三年で数えるほどしかなかった。

我慢のない生活は快適である。だが、そのせいで肛門括約筋が我慢をすることに慣れていない。尻の穴をきちんと閉じる以外に、ヒロミにできることは残されていない。

(他のトイレ……は、もっと酷いことになっているんだよね。こうなったら、ミヨちゃんが出てくるのを待つのが一番早いかな……)

鍵のない扉を見ながら、ヒロミはお腹をさする。違和感を覚え始めてから一分足らずにも関わらず、腹の具合は急速に悪化していた。腹痛は下腹全体に広がり、鼠径部から肛門に掛けて重いものが押し寄せてくる不快な感覚がある。何より、尻の穴には、その直上にある直腸から強烈な圧力が掛かり始めていた。

(う、うんち……したい。もう少しなら我慢できそうだけど、どうだろう……ミヨちゃん……)

直腸に大便が溜まり始めると、ヒロミの相好が崩れだす。普段の落ち着いた様子は消え失せ、代わりに焦りと苦痛に満ちた表情を浮かべながら、ヒロミは扉を見つめ続けていた。額からは脂汗が垂れ、身体は細かく左右に揺れ始める。一步一步、けれども急速に、ヒロミは我慢の限界に向かって突き進む。

最後の望みはミヨの腹具合だった。草むらで目撃したミヨの排泄物がフラッシュバックし、想像よりも遙かに多かったその量を思い出す。直径五十センチ近い水溜まりと化していた下痢便をすでに野の中へとひり出したミヨの腹には、さほど多くの大便が残っているわけではないに違いない。ミヨがそれを出し切りさえしてくれば、扉の向こうにある便器はヒロミのものになる。

ミヨが便器を占有し始めてからすでに三分が経過していた。断続的に響いていたミヨの排泄音も徐々に小さくなっており、ミヨの腹具合も落ち着きを取り戻し始めて——

ブブブブブブウウウッ！　ピチピチピチビビビッ！！

「……っ!」

刹那、寮のどこかで手榴弾が爆発したかと思うような爆音がヒロミの耳に届いた。寮内での爆発事故であれば毎週報告書が上がってくるような日常茶飯事である——だが真夜中に起こったこの爆発は、もっと身近な場所、そしてヒロミにとってはもっとも起こって欲しくない人間によって引き起こされたもの。

(ミヨ、ちゃん……まだ、掛かりそうかな……)

扉の向こうでは、相変わらず腹を抱えて緊張っているミヨの尻がちょうど大きく開き、二度目の大爆発が起こったところだった。

プビビビビブウッ! ぶりりいっ! ぶばばばっ!

「んぐうう……っ! ふうっ、うづっ……!」

(ガスが、急に……ヒロミちゃんに、音を聞かれてるかも……)

暴れに暴れているミヨの大腸は、ヒロミの期待とは裏腹に、今もなお下痢便とガスを生み出し続けている。液状の大便とともに生み出された大量の気体は、僅かな下痢便と合さりながら肛門へと殺到していた。腹圧が急速に高まり、直腸がガスで満たされて膨らむと同時に、肛門に強大な圧力が掛かる。緩みに緩んだ出口がその圧に耐えられるはずもなく、苦痛からの解放を願うままに開かれた校門からは、爆発的な音とともにガスが噴出していた。

ミヨの尻の下には茶色の水が溜まっている。形を保った成分はごく僅かで、数個の焦茶色の破片が水面にぶかぶかと浮かんでいるのみで、封水もろともその中身は茶色い水だった。白かったはずの斜面に飛び散る無数の茶色い斑点が、ミヨの排泄の勢いを物語っている。

(もう、結構な時間トイレに……。ヒロミちゃんの部屋のトイレでい

つまでもうんこをしているのも恥ずかしいので、早く切り上げたいのに……お腹が、お腹が痛くて……。ううっ!)

ぶつぶうううっ! ビチビチビチブリー~~~~ッ!

尻の穴へと押し寄せてきたガスを出し切るために再度尻を開けば、三度目となる大きな放屁の音が響く。下腹に圧迫感をもたらしていたガスが身体の外に出たことで腹痛が和らぎ、ミヨは一瞬だけ、安堵から笑顔を浮かべた。

けれどもその表情もすぐにまた崩れていく。ガスを出し終えれば再び下痢便を出すターンが回ってくる。蠕動運動の波に乗って下流へと移動した下痢便が直腸の中に溜まると、程なくして猛烈な便意がミヨを襲う。相好を歪めたミヨが下腹に力を入れれば、放屁音とは一転し、重厚感のある脱糞音が部屋の中に響き渡る。

ドボドボドボドボビビビビブリュブリュブリュッ!!

草むらにしゃがんでいた時間を合わせればすでに十五分にわたってミヨの尻は開かれている。それでも排泄の勢いは衰えず、ミヨの尻は現在進行形で汚い水を吐き出し続けている。

その排泄音は着実に、扉の外でもぞもぞと身体をよじらせるヒロミから精神力を奪い取っていった。排泄音が想起させる脱糞という行為が、ヒロミの大腸を際限なく刺激して蠕動運動を加速させていく。だがそれ以上に、扉の向こうで友人のミヨが排泄をしているという事実が、羨ましくて仕方がない。今のヒロミにとって、間違いないミヨは羨望の対象だった。

(ミヨちゃん……まだ、うんちしてる……。そ、そろそろ私も限界かも、これ以上はもう我慢が……)

扉の向こうで便器を使っているミヨに思いを馳せる。ヒロミ自身も今すぐトイレに行きたい。かといって、友人であるミヨにもまた、お漏らしに至ったり、草むらで野糞をしたりしてほしいわけではない。どうしようもない葛藤がヒロミの脳内にはある。

（あのとき、ミヨちゃんに「トイレ使って良いよ」なんて言わなければ良かったのかな……？　で、でもそうしたら、ミヨちゃんはきっと今頃も草むらで、うんちを……）

ゴロロロロロログキュルルルルッ！　グウウウウウッ！

（ううっ！　う、うんちしたいっ！　ミヨちゃんを急かすのだけはしたくなかったけど、もう限界……っ！）

強固な友情も、友人を思うその想いも、迫り来る便意には勝てなかった。必死にさすっていたお腹から右手を離し、その手をドアへと向ける。叩きたくなかったそのドアを叩き、ヒロミは扉の向こうで苦しんでいるミヨに声を掛けた。

——コンコン。

「ミヨちゃん……」

「ヒロミちゃん……？　ど、どうしましたか……？」

「ミヨ、ちゃん……まだ、掛かりそうかな……。私も、お腹が痛くなってきたやつて、その、トイレ……行きたい……」

こうなれば正直に打ち明ける他に選択肢はなかった。自分の現状のありのままを伝え、ミヨに一分でも、一秒でも早く便器を譲り渡してもらおう。目の前にある便器に腰掛ける以外に、ヒロミが願っていることはなかった。

扉の奥に座っているミヨは反面、焦りを露わにしていた。トイレを

貸してくれた心優しい友人であるヒロミが、腹痛に苦しみ便意を催し、ミヨの足下にあるこの洋式便器を欲している——一刻も早く譲らなければならぬ。すぐに尻の穴を閉じ、トイレットペーパーで汚れを拭い取って立ち上がる。

——ことが容易にできれば、どれほど良かっただろうか。

（うんこが、止まらない……お願い、止まって……止まって……）

ブジュブリブリブリビビ……ブビュブリリ……ブツ。

「はあーっ、ふうううっ……ふうううっ……」

全力で肛門を閉じる。液体が断続的に噴き出していた出口が窄まり、赤く腫れ上がったいた肛門が閉じていく。噴出が止まってもそれまでに塗り重ねられた汚れは消えず、茶色に塗れた肛門は絶えず小さく震え続けている。

「はあ、ふううっ、ふううっ、ふううっ」

荒く息を吐きながら、ミヨは苦しい表情を浮かべつつもペーパーホルダーに手を伸ばした。紙を一巻き、二巻きと右手に巻き付けていき、尻に付着した汚れを拭い取るためのペーパーを取る。

ゴロロロロログルウ~~~~ピッ！　ごぼごぼごぼっ!!

「うううっ!?　はあ、はあ……う……う、ぐっ!」

その紙を尻に当てようと背中側に手を回した瞬間、ミヨの相好が大きく歪んだ。ただでさえ苦痛に満ちた表情を浮かべていたミヨが、悶絶し、言葉にならない声を上げ、うめいている。尻の穴が大きく震えだし、肛門の周囲を覆う茶色の体積が、心なしか増大する。

「が、が、まん……我慢……っ!」

ミヨが口走る——ミヨは大便を我慢しようとしていた。この洋式便

器を欲している友人に部屋を譲り渡すために、今にも溢れ出しそうな直腸の中身を体内に留め、自らはトイレから出ようとしている。無理矢理塞がれた出口は激しい内圧にさらされ、肛門括約筋との苛烈なせめぎ合いが行われていた。

だが、それほど強靱な精神力を持ち合わせていたとしても、排泄途中の大便を我慢することは不可能に等しい行為だった。大腸は容赦なく下痢便を直腸へと送り込み、有限の力たる肛門括約筋の力に対抗するべく、無限に直腸を重くする。内部からの圧力は締め付けの力を上回りかけ、閉じたはずの肛門は三十秒という短い時間を経て決壊に突き進もうとしている。

加えて、今のミヨがいるのは洋式トイレ。我慢をしている途中というわけでもなければ、草むらにしゃがみ込んだ後でもない。

言うなればミヨは、排泄が許された場所で、排泄が許された体勢のまま、大便を我慢しようとしている——本能がその欲求に耐えられるかと問われれば。

——答えは否、だった。

プビビビビビビッ、ピチピチピチピチピチピチッ！

「うぐううう……っ！ ヒロミちゃん……ごめんなさい……」

「ミヨ、ちゃん……？」

「我慢、できないです……はあ、ううっ！」

ぷりりりいっつ、ピチピチピチピチ！ プリユッ。プビビビッ！

ミヨの尻から再び破裂音が響く。わずか数十秒の我慢ながら、ミヨの直腸は下痢便でばんばんに膨らんでいた。我慢の末に駆け込んだ直後のような勢いでの排泄が続き、ミヨは会話すらままならない状況の

中で、再び腹の中身を絞り出すことに集中することを強いられる。

その音の全てを聞いたヒロミは、ミヨが必死にそのトイレを譲ろうとしてくれていたことを悟った。返事もなく、排泄音も聞こえないあの三十秒という間は、ミヨが必死に、ヒロミのためにトイレを空けようとした苦闘の時間だった。

ゴロロギョルギョルギョル……ぷりりっ！ プブウーッ！

「うう……。もう……。無理、かも……」

我慢に慣れていないヒロミの肛門は破裂しかかっていた。閉じようとしても閉じ切れない肛門からはガスが漏出し始め、内側からの圧力は肛門の耐久限界を超え始めている。それでも容赦なく大腸は蠕動運動を続け、下痢便をどくどくと直腸の中に流し込み続ける。重く伸びきった直腸は、いつ身体の外にその中身を放出してもおかしくない。

「ミヨ、ちゃん……っ」

プビビッ ぶう ぷりりっ！ ぶじゅ びぢぢ プウウッ！

ヒロミがミヨの名前を口に出す。

ヒロミが必死に閉じる尻から、絶え間なく屁が漏れ出す。

「ヒロミ、ちゃん……っ！」

ブリリリリビチヂイッ！ プジュウウブリブリリッ！

ミヨがヒロミの名前を呼ぶ。

ミヨが必死に閉じようとする尻から、激しく下痢便が噴き出す。

ゴロロロロギョウウウウゴロゴロゴロロオオッ！！

「ひう……っ！」

不意にヒロミの表情が歪む。先ほどの強烈な便意の波よりも遙かに暴力的で、激烈で、耐えがたい便意が、ヒロミの肛門に一気に襲

いかかる。ノックも、お腹をさすることもできない。両手でスラックスの上からお尻を押さえ、ありったけの力で尻の穴を押さえつける。それでも——尋常ではない便意には抗いきれない。

「ぐうぐうっ……んああああ……ああああ……っ！」

歯を食いしばり、誰に聞かせたことのないような重苦しい声で叫んでも、尻の穴の決壊という運命からは、逃れられなかった。

3 薄葉リツ

(……うんちしたい)

真夜中に突然、下腹部の違和感を覚えて薄葉リツは目を覚ました。理由も分からなければ、心当たりもない——だが、大便がしたい。トイレに行つて、大便を出したい。その単純で、最も根源的な欲求によって、リツの意識は深い睡眠から覚醒状態へと引きずり出された。

とはいえ、枕元の時計を見ればまだ真夜中。まだ眠気も残る中でトイレになど行きたくはなく、できることならば我慢したい。このまま寝てしまえば、翌朝普段通りにトイレを済ませるだけになる。

だが——今のリツが抱えている便意は、一晚持ち堪えられるほど弱いものではなかった。

ゴギョルルルルウッ……ぐううう……っ！

(だめかも……うんち、我慢できない……)

リツの腹に溜まっている、二種類の大便——直腸の下半分を埋め尽くしている、健康的な堅さの大便と、その上に徐々に積み重なりつつある緩い大便の双方が、リツの肛門をゆっくりと攻撃している。重く

なりつつある直腸を支える肛門括約筋も悲鳴を上げ始め、布団の中で足を閉じ、じっと集中しなくては我慢ができない。

そんな状況ではもう、寝ることはままならなかった。トイレに行き、便意を解消しなくては、安眠できないだろう。リツは寝ぼけ眼をこすりながら起き上がり、シングルベッドから這い出てトイレの方へと歩き出す。その間もずっと、下腹から手は離れない。

ギョルギョルギョルゴポポポポッ！　ぐるるっ……。

(うんちしたい、それも下痢っぽいんち……なんだろう、食べ過ぎた訳でもないのに……お腹痛い……)

歩く間もずっと、リツの脳内では疑問符がぐるぐると回っている。昨晩食べたものを思い返しても、生ものを食べた記憶も、食べ過ぎた記憶もない——昼食も夕食も寮の食堂で、昼にはラーメンとシュウマイ、夜は鶏のシチューと生野菜のサラダ……お腹を壊すような食べ物とは、リツにはとても思えなかった。

トイレの扉が見えてきてリツはほっとため息をつく。誰も入っていない扉を開け、トイレの中の電気を点けると同時に扉を閉め、鍵を掛ける。トイレの蓋を開け、寝間着のズボンとショーツを同時に下ろして座り込めば、排泄の準備が整う。

「ん……っ」

じゅううううじよろじよろろろろ……しゅうつ。

下半身の力を緩めれば、便意に隠れて徐々に高まりつつあった尿意が先に開放される。まだほとんど何にも覆われていない陰部から薄い黄色の液体が進り、便器の中の封水が薄く染まっていく。およそ一秒の後、その音が止まったのが、排便を開始する合図。

「うん……うんっ……」

真夜中のトイレの静けさの中、リツは極力声を抑えながら下腹に力を込めていく。けれども息も声は完全になくなることなく、トイレの外にもかろうじて聞こえる程度の声を漏らしながら、リツはお尻の穴を広げ、茶色の物体を身体の外へとひり出していく。

直腸の下半分に溜まっていた固形の大便を出すのには、さほど時間を要さなかった。便秘に悩んでいるわけでもないリッツの腸から生み出される大便はいったって健康的で、表面には適度な水分が残されている。校門が開かれれば後は、自重によって下に落ちていく大便が、水面に向かって伸びるのみだった。

「んんっ……ふはあ！」

ぱちゃんという軽い音とともに、リツの身体から生み出された固形便が着水する。水よりも僅かに比重の軽い大便は、洋式便器の中で水面に浮かんだままだった。普段の朝であればリツはすぐにトイレレットペーパーを手に取り、トイレを出て次の順番——大概の場合はミヨに便器を譲っていたことだろう。

ごろろろろろろつ、ぐぎゆるるるる……。

（お腹痛い……下痢のうんちが、出そう……）

やがて、その腹の音がS状結腸を通り、直腸へと到達した——突如強烈な便意がリツを襲うまでには、そう時間を要さない。

[illegible]

次の瞬間 リツは自分の身体から生み出されたとは思いがたい破裂音を耳にしていた。尻の穴で緩いものが弾け、それと同時に熱い気体が勢いよく真下に向かって吹き出していく。僅かな快感と、それを遙かに上回る腹の痛みを同時に感じたリツは、顔をしかめながらお腹に手を当て、同時に上体を前に倒す。

相対的に後ろへと突き出された尻から再び軟便が飛び出し、便器の中に向かつて弾け飛んだ。

ぶぼつどぼどぼ……ぶうつ！
ぶびつ、びちつ、ぶううううつ！

時間を追うごとに大便に含まれる水分量が増加し、軟便が下痢便へと変化する。便器の中に鎮座する濃い茶色の固形便とは打って変わって、やや薄めの茶色から黄土色になった下痢便が、リツのお尻から便器に注ぎ込まれる。

強烈な痛みを前に睨っていた目を開き、足と足の間から便器の中の様子を窺い見る。水に溶けることのない固形便とは対照的な、ドロドロで水に溶けてゆく黄土色の下痢便が、現在進行形でリツツ自身の尻から降り注いでいる。あまりにおぞましく、そして激しい排泄が、眼下

では続いていた。

(くさい……でも流したらミヨちゃんとかも流しちゃうかもしれないから、このまま……)

背後にあるタンクのレバーを倒せば、一度便器の中の惨状を流し去ることはできる。だがその際に響く水流音は、眠りにについている同居人の二人を起こしてしまうかもしれない。

どのみち、リツが使った後には誰も入らないトイレである。排泄行為の最中に臭いを感じてしまうことを甘んじて受け入れたリツは、再びその手をお腹に戻し、何度も左右に動かす。

ギユウウウウッ……ゴロゴロゴロゴロ！

(まだお腹がゴロゴロしてる。水っぱいうんち、結構出したはずなのにまだ止まらない感じがするけど……)

身長わずか一四〇センチの小さな身体にも、下痢便が溜まっている。腹を下げば体格など関係なく、痛む腹から常に生み出され続ける下痢便は、そう時間を掛けずに再びリツの直腸を満たした。重く垂れ下がった直腸が、リツの尻穴を開かせる。

「うんっ、ふう、はああ……っ！」

プビュウウッ、ドボドボドボ！ プチュプチュプチュビチビチ！

下痢の排泄は一度では終わらない。断続的に何度も押し寄せる波が、再びリツを苦しめた。狂ったように蠕動を続ける大腸が、徐々にその牙を剥き始める——蠕動が加速し、経験したことのない下腹の痛みがリツを襲っている。痛む腹を抱え、上体を倒しながらリツはただ、その腸管の出口たる肛門を開き続けることしかできなかった。

ぷりゅっ、ぶばばっ、ぶううううううっ！

にわかにガスが噴き出せば、もうトイレの中に響くだけでは収まらない破裂音が尻から響く。身体は小さくても、腸管の中で圧縮されていたガスが勢いよく噴き出しさえすれば、その音を外に響かせるには充分だった。リツも少々の羞恥を覚えたのかほんのりと頬を赤く染めるが、だからといって尻の穴を窄めることができるわけでも、排泄を止めることができるわけでもなかった。

すでに便器に腰掛けてから五分が経とうとしている。真夜中の孤独な闘いは、想像していた以上に長引いていた。扉の外からは物音が聞こえることもなければ、後続のミヨやフユに急かされることもない。それはありがたいようで、だが同時に、リツが一人この場で苦しんでいるという事実を浮き彫りにする。

(なんで、ボクだけ……こんなに、お腹が……っ！)

プウッ……！ プチュッ、プビビ……プチュルルルッ！

理不尽な腹痛を恨んでも、その攻撃が容赦をしてはくれなかった。蠕動が生み出した液状の大便が押し寄せ、直腸に溜め込まれる。すでに出口を塞ぐ役割を放棄しつつある肛門括約筋は全開になったままで、直腸の中身を間髪入れずに便器へと注ぐ。ドボドボという水の中に水が注がれていく音が、リツの耳に残る。

出しても出しても、その便意がおさまりそうな気配は未だに感じられない。腹は絶えず痛み、大腸は常に蠕動運動を続け、肛門には下痢便が押し寄せ続ける。その全てから逃れる術を持たないリツは、いつまでも便器から尻を離すことができず、ただ洋式便器に座り、尻を開き続けることしかできなかった。

プウウウーッ！ ベチヨベチヨビチビチ……ッ！

「うぐう……またあ……」

第三波と呼ぶべき下痢が始まり、リツは再びうずくまる。どうしようもない無力感を覚えながら、リツが正面の扉を見た——そのとき。

「……あ、あれ？」

「……………フユ、ちゃん？」

扉が二度揺れ、その向こうからは聞き覚えのある声が聞こえてきた。

4 若狭フユ

若狭フユは、腹を下していた。

悶絶しながら慌ててベッドから起き上がるほどに、腹が痛い。

何故真夜中に腹が痛くなったのかも分からない。

原因の心当たりも分からない。

ただ——

「うう、……………っ！」

——どうしようもなく、大便がしたかった。

突如として始まった原因不明の腹痛に喘ぐフユの相貌は、かつて見たことのないほどに歪んでいた。その端麗な顔は苦痛によって碎かれ、ベッドのすぐ横に立っているのは、どうしようもなく強烈な便意を催してしまった、一人の高校生の少女に過ぎなかった。

「トイレえ……………」

二段ベッドの下段に寝ていて良かった——とフユが思ってしまうくらいには、その我慢は切羽詰まっていた。腹を抱えて目指す先はた

だ一つ、この第五寮四〇二号室にただ一つあるトイレである。

ただフユは、急ぐあまり、自身が使っている二段ベッドの対面にあるシングルベッドがもぬけの殻になっていることに気づかなかった。部屋のトイレという真夜中であればまず無人のトイレに、誰も入っていないと信じて、フユは足を急がせる。もうすぐ洋式トイレに腰を下ろせると確信して、フユはトイレの扉に手を掛けた。

——ガタンッ!!

扉は開かない。押せば下がるはずのドアレバーは、フユが力を掛けても押し下がることはない。

フユはもう一度ドアレバーを押し込んだ。

——ガタンッ!!

やはり扉は動かなかった。腹痛ではない、別の不快な何かが急に胸の中に広がっていく……それが俗に言う「嫌な予感」であることに気づいた直後、フユの目の前にある頑強な扉の向こうから、声がする。

「……………あ、あれ？」

「……………フユ、ちゃん？」

その声に聞き覚えが無いわけがなかった——トイレにいたのは間違いない、同じ部屋に住むリツ。フユが座りたくて、大便がしたくて堪らないその便器に座っているのは、他でもないリツだった。

「リツちゃん……………？ えっと、トイレ、すぐ終わるよね!？」

「フユちゃん……………。その、すぐく、ごめんね……………？ ううっ」

ビチビチビチビチビチビチブブブ……

だけ近くなっていた。

